

異世界転生した俺が厄神様の厄になっていた件について

水無飛沫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

厄の日という魔力に逆らえませんでした。

今後の展開は一応考えていますが、単発で終わる可能性が高いです。

※
と言っていたのも既に昔。

既に20話を余裕で越えていて、お陰様でそこそこ続けられています。

あと数話で完結します。

※※

完結致しました（2021/09/02）

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 壹、厄神様と厄い厄 | 1 |
| 貳、にとりの厄退治 | 4 |
| 〜前編〜 | |
| 〜後編〜 | |
| 参、にとりの厄退治 | 7 |
| 〜後編〜 | |
| 肆、異変解決☆巫女・霊夢 | 10 |
| 〜前編〜 | |
| 伍、異変解決☆巫女・霊夢 | 13 |
| 〜中編〜 | |
| 陸、異変解決☆巫女・霊夢 | 16 |
| 〜後編〜 | |
| ☒、閑話休題 | 19 |
| 捌、あーかい巫い女とみどりの巫い女(リズムよく) | 22 |
| 〜前編〜 | |
| 玖、風祝 | 26 |
| 拾、追憶と風習と…… | 30 |
| 拾壹、喪失感 | 33 |
| 拾貳、ていーぱーていー | 36 |
| 拾参、ドキドキ☆お風呂はぶにんぐ(にゆるりもあるよ) | 40 |
| 拾肆、禊(前編) | 44 |
| 拾伍、禊(後編) | 47 |
| 拾陸、憂悶 | 51 |
| 拾☒、顛末 | 54 |
| 【過去】人形師 | 60 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 63 |
| 第1話 | |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 66 |
| 第2話 | |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 69 |
| 第3話 | |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 73 |
| 第4話 | |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 78 |
| 第5話 | |

| | | |
|-----------------|------|-----|
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第6話 | 81 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第7話 | 84 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第8話 | 88 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第9話 | 92 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第10話 | 96 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第11話 | 101 |
| おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 | 第12話 | 105 |

壹、厄神様と厄い厄

「もう、なんで落ちてくれないのよお」

少女が半泣きで水浴びをしている。

彼女の名は鍵山雛。厄を集め厄を流す、厄神様と呼ばれる妖怪だ。通常ならば集めた厄をこの川で注ぎ落すのだが、

その厄がなにをやっても落ちてくれず、禊をしながら途方に暮れている。

しかししてその原因は……俺だ。

今回は読み切りなので詳しいことは省くが、

不運な事故によって幻想郷の厄に転生した俺は、こうして雛のもとへと導かれてしまったわけである。

最初こそ彼女から離れられずに不便したものだが、

共同生活を送っているうちに切っても切れない関係へと（一方的に）成長したのである。

言うなればこれは恋。

俺が厄に転生したのは運命。そう、偉大なるガイアがもたらしたデイスティー。

「はあ……明日にとりに相談してみよう」

夕陽も沈みかけ、既に夜が迫っている。

雛は川から上がると、露出の少ないドレスを身に着ける。

俺は紳士なので着替えをするレディの邪魔をするようなことはせず、少し距離を置いて彼女の様子を眺めている。

そんな俺を見て、彼女がため息を吐く。

（あれ……俺に気づいて……？）

一瞬ドキツとするが、すぐに思いなおす。

幻想郷において、厄の集合体は目に見える黒いモヤのような姿をしている。

透明人間になったのではないのだから、見られるのは当たり前なのだ。とはいえ、俺という意味がバレてしまうと色々と厄介なことになり

かねない。

恐る恐る彼女に纏わりつく。

「なんか一々いやらしいのよね……」

つぶやく彼女に、「ソナナコトナイヨー」と心の声を投げかけておいた。

さて、夜だ。

そう諸君、夜が来た。

毎夜のこととはいえ、ちよつとソワソワしてしまう。

文学的な表現をするならば同衾の時間である。

同衾は「今、同じ衣」と書く。

古来の日本人は衣服を布団代わりにかけていたというので、同じ布団なう……つまるところ添い寝である。

今の俺は雛の厄だから、不可抗力。シカタナイネ!!

寝間着に着替えた雛。うん、今日も可愛いね!

薄桃色のネグリジエはどこことなく淫靡に俺を誘っているように見えるし、

普段は隠している彼女の人ではない部分を浮き彫りにしている。

嬉々として彼女に纏わりつく

「だんだん重たくなってるのよねえ、これ」とため息を吐かれてしまった。

そう、流されない厄は蓄積する一方なのである。

それに伴って、厄の濃度と危険性は徐々に増えていく。

(危険……俺が? 別に俺は雛に悪さしないのに)

まあ、もし何か危険があるようだったら大人しく流されるのもいいかもしれないな。

どうせまた雛に収束していくわけだし。

そう、これは無限に続く約束された恋の歌(アンリミテッドラブソング)!

雛に覆いかぶさって彼女の寝息を聞きながら、俺もまた眠りに落ちる。

俺と雛の厄い生活は、まだ始まったばかりなのである。

式、にとりの厄退治　　く前編く

「これはまた、厄介な現象だねえ。厄だけに」

雛が相談を持ち掛けているのは河城にとり。

川をくだった先にテリトリーを持つ河童である。

濡れた碧の髪と瞳。

緑色の上着とスカートは対水仕様なのか、光を反射させる滑り気を帯びていて、

背負った鞆は、どこことなく小学生のそれを連想させて、ちよつと興奮してしまう。

いや、俺はロリコンではない。断じて違う。

にとりはJSよりは成熟していてどちらかというところJKぽいのだ。

そんな彼女がラン○セルを背負うことによって醸し出す背徳感は一ハンパない破壊力を持っているのである。

しかも!! しかもですよ、お客さん!!

その鞆は胸の前でクロスさせるタイプの紐……つまり、ダブルパイプスラーである!!

なんだこれ。いやらしい!!　っていうか犯罪でしょ。

河童恐るべし。

いや、大丈夫。俺は雛一筋だから。

「これあとで　一つ貰って　行きましょう」

雛に背負って　もらいたいんだ」

いかんいかん、一句読んでしまった。

頭を振り、意識を二人のやりとりに戻す。(厄に頭なんてねーだろ、ってツツコミはよしてくれよ。賢明なる読者の皆様)

「それで、あなたのあの……怪しげな道具(?)でなんとかならないかしら……」

自信なさげに「道具?」と語尾が上がる雛は最高に可愛い。

「怪しげな道具じゃなくて、機械だよ。まっすいーん」

にとりに続いて「まっすいーん」って発音しちゃう雛、滅茶苦茶可愛

い。俺の嫁。

「それでね、道具もそうなんだけど、機械つてのは使い方を定められて作られるんだけど……」

ちよつと真面目な顔をしてにとりが説明をする。

歯切れが悪く、目が泳いでいるのは罪悪感とかそういった類の感情のためだろうか。

「じゃあ厄を散らす機械はないの？」

機械に疎い雛にも、にとりの言いたいことは伝わったようだ。

「本来は雛には必要のないものだからねえ。こんなことになるだなんて思いもしなかったよ」

無念そうに話すにとりに、雛はただ「……そう」としか言うことが出来ない。

ちよつぱり気まずい雰囲気、俺の方がオドオドしてしまう。

やっぱり一度雛から離れたほうがいいのだろうか。

けど、こんな可哀そうな雛を見ると、俺が守ってやらなければ、とか思ってしまうわけで。

（よし。大丈夫だぞ、雛。お前に憂いをもたらす全てのものから、俺が守ってやる!!）

と意気込むものの、原因は俺だったりするから、もうどうしようもない。

「なんてね。嘘だよ」

「え？」

「こんな事態も想定して動くのが、真の科学者なのだよ」

ドヤアとにとりが胸を張る。

ただでさえ強調されてるんだから、そのおっぱいが強調されるポージングやめなさい。

ハイエースでお持ち帰りしたくなっちゃうでしょ!!

「おーっ」

にとりの演説を聞いて、雛はパチパチと手を叩いて驚嘆の声をあげた。

その顔は素直に賞賛と尊敬に満ちていた。

「それに……」にとりが少し照れ臭そうな顔をして続ける。

「大事な親友のことだからね。それくらいは考えちゃうよ」

見てるこっちまで心がほっこりするようなデレである。

当事者の雛にはその威力はハンパないはずである。

そう思い雛を見ると、案の定すでにボロボロと泣いている。

「にとりーっ」

手を広げ、にとりに抱き着こうとする雛であったが

「あーっ、それ以上こっち来ないで!!」

にとりが慌てて両手を前に出して「止まれ」のジェスチャーをする。

キョトンとする雛（かわいい）に、にとりは小声で「あんまり近づ

くと、そのえげつない厄が移りそうだから」と

照れ隠しなのか本音なのかわからないトーンで告げる。

「にとりいらいっ」

今度は別のニュアンスで雛が泣いている。大丈夫、俺はいつまでも

傍にいるよ!!

「そんな顔しなさんな。ちよつと待ってて。今、『厄取りホイホイ一番

星くん』取ってくるから」

「す、すごいネーミングね」

「まあね。期待しててよ」

そう言つて河の中へと沈んでいくにとり。

……つて、機械を水の中に仕舞っておいていいものなのか？

一抹の不安を残したまま後編へ続く。

惨、にとりの厄退治 〔後編〕

「というわけで、こいつの出番だ！」

パパパン!!と狸猫が秘密道具を出す時の効果音を口ずさみながら

にとりが持ち出ししてきたのは、棒にトゲトゲがぶっさしてある……どうみても釘バット。

「ええと、これが厄取りマシーンなのね」

ちよつと引きつった笑顔で雛が確認する。

「マッスイーン」とそれをネイティブな発音で訂正しながら、フフンとにとりが強調するように胸を張る。

「厄取りホイホイ一番星くんだよ」

そのネーミングセンスはどうかと思うよ。あのその見た目の凶悪さ……。

「じゃあお願いします」

意を決した雛が頭を下げる。

「任されたー」

言い終わるや否や、にとりが雛に向けて釘バットの切っ先を向ける。

「すいっちょんー!」

シュポンという音とともに、バットの先端が開かれ、中から飛び出した粘液が雛を襲う。

「えっ!? きゃあ!!!」

ネバネバした粘液に体中包まれる雛。

どう控えめに見ても、ローションじゃないか、これ。

(よくやった、にとり!! 衣服だけ溶かすやつかな?)

いや、待て……これは……)

「うう……ベタベタするう」

涙目になりながら、粘液と格闘する雛を、にとりが制す。

「まあ、じつとしててくらんよ」

「そう言っても……うう、気持ち悪い」

ローションまみれになるイケナイ作品を想像させる。

……のだが、実は俺はというと、あんまり余裕がない状況に陥っていた。

(なっ、体が、動かない……!?)

ローションが厄である俺の姿を固形化させてしまっているのだ。

まさしくホイホイ。恐るべし!!

「くくく、これが厄取りホイホイくんの実力さ」

厄から切り離すように雛の手を引くと、キラリ、とにとりの瞳が光る。

(その表情……もしかして、俺の存在に気づいて……?)

いや、これだけ傍に居る雛すら気づいていたないのだ。

きつとそんなわけ……。

(それにしても、これは本当に、ヤバイんじゃないか……?)

古来より日本にはこんな諺があつてな。

(やられる前に、ヤれ!!)

俺の厄としての能力をにとりに向けてフルパワーで開放する。

「んんっ」

にとりは小さく喘ぐと、居心地が悪そうに腕を胸の前で組んだ。

(くくく、やつらのブラのホックを外してやったぞ!!)

……今はこれが精いっぱい。

「なんか意思でもあるんじゃないのかい？」

まあ、偶然だろうけど。

ポツリとつぶやき、鞆のヒモをきつめに調整して胸部を固定すると、にとりは手に持ったバットを大きく素振りしてみせる。

「厄の動きを封じて固形化したところで、一番星くんの出番ってわけ」
くそう、隙を生じぬ二段構えか!! (それよりも揺れる胸に興奮を抑

えきれない。まあ俺は雛一筋だから、興奮するだけなんだけど)

こんな固形化された状態で殴られたら、さすがにただでは済まない
……と思う。

「バッチ来いやああああ!!!」

掛け声とともに、にとりの全力スイングが俺を襲う。

(それはピッチャーのセリフうううう!!!)

心の叫びとともに、俺の体は粉々になって河を流れて行きましたとさ。

「ありがとう、にとり!!」

雛の嬉しそうな声が、河を流れていく俺の耳にも届いた。

(君の笑顔を見られないのは少しだけ悲しいけど、君が笑ってくれてよかった)

めでたし、めでたし。

数日後、そこには元気に雛にまわりつく、俺(厄)の姿が……。

「いやああ、全然めでたくないいいいい」

流れていかない厄を眺めながらため息をつく雛の瞳には、既に生気が抜けている。

それはそれで、本当のお人形さんみたいで背徳的な可愛さがある。

「厄自体に異変が起きているのだとすると、巫女の出番だね」

おのれ、ダブルパイスマーメ。余計なことを提案しおって。

怒りに任せて再びにとりのブラホックを外す俺であった。

肆、異変解決☆巫女・霊夢　　〈前編〉

「それで、私に声がかかったというわけね」

にとりに連れてこられたのは、紅をベースとした巫女服のようなものを身に纏った少女だった。

彼女の名は博麗霊夢。

妖怪退治・異変解決で名をあげている博麗神社の巫女である。

「それにしてもこれは……妖怪なの？　それとも異変？」

俺を指さす霊夢の笑顔が引きつっている。人を指さすだなんて失礼しちやうわね。ぶんぶん。

苛立ちを収めるために、にとりのブラのホックを外す。

「!?」

一瞬表情を堅くするにとりであったが、もう慣れてきたのだろうか、無言で背中に手を回すと器用にホックを付けなおした。

……こいつ、服の上からっ!?　テクニシャンめっ!!

「さあ、妖怪ではないと思うのだけれど……」

上手く流れてくれない上に、どんどん重くなっていくのよね」

はあ、と雛がため息を吐く。頬に手を当てたアンニユイな表情が少しそそる。

「厄自体の性質が変わってるんじゃないかな」

こいつ、なんかエッチだし。小声でにとりが吐き捨てた。

「まあ仕事だつて言うならなんだつていいんだけど……」

つぶやきながら巫女が酒と塩をテキパキと並べていく。

おお、流石は本職だな。手慣れてらっしやる。

小さな盃に酒を注ぐ、袖から覗く細い手は神事の前の緊張感と少しだけ背徳感が織り交ぜられている。

控えめに言っただけ神秘的な光景だ。特に露出させている腋のあたりが。

（一体なんのために……体の一部を露出させているんだ。そういう特殊なアレなのかな？）

形而上学とも言える考察を並べていると、巫女の口が小さく動いた。

「厄払いは大事な食い扶持だったのに、最近は厄払いの仕事も他に流れ気味だし……」

「あいつらまとめて焼き打つしかないな」

「さらっと怖いことを言う巫女だな。逆らわない方が良さそうだ。」

「なおも準備を続ける霊夢であったが、俺の好奇心が日本酒に引き寄せられてしまう。」

「ちよつとだけ……舐めるだけだからっ!!」

「黒いモヤの一部が盃に触れると、そこから体に酒が流れ込んでくる。」

「(ピリツとした辛口で……澄んだ水で作られているのだろう、とても飲みやすい……)」

「こんな旨い酒を飲まないのは勿体ない。」

「もう一口飲もうと意識を集中させたところで霊夢が手に持った御幣で払われてしまった。ぐぬう。」

「さて、厄を祓えばいいのかしら?」

「準備を終えた巫女が改まった口調で尋ねる。」

「いいや、祓ったところで同じ状況になるんじゃないかな」

「と、にとり。さすがに聡い。」

「じゃあどうする?」

「キョトンとする巫女に「滅してくれ」と、にとりがひと言。」

「わかったわ」

「そう言った時の巫女表情を俺は一生忘れないだろう。」

「ニヤリとほほ笑んだその顔には、邪悪と暴力と狂暴性がマリアー
ージュしたような表情が浮かんでいたのである。」

「祓い給え 清め給え 守り給え 神ながら 幸い給え」

「シャリ、シャリ。」

「御幣を振りながら巫女が祝詞を唱える。」

「高天原に神留り坐す、皇親神漏岐、神漏美の命以て——」

手を動かすたび、巫女の腋から胸に巻いたサラシが目につく。

(こいつ……ブラじゃなくてサラシ派か……)

腋から覗くサラシのライン。ブラと違い、腋と胸の境界を曖昧にしたユートピア。

これはもはや、とか腋や背中、二の腕さえも胸と言うことになるまいか!! (反語表現)

「此く聞こし食してば 罪と言ふ罪は在らじと——」

祝詞はなおも続く。

俺の体には未だ異変はない。

神妙な面持ちで正座している雛に、俺は大丈夫だと語り掛けるように纏わりついている。

役得? いいえ、厄得です。(ドヤア)

向こうからは存在を認知されていないのだから、やらない理由がない。

再び手（モヤ）を彼女に伸ばしたところで、俺の体に異変が起こった。

（くっ、なんだ……これ……）

視界が白い色に覆われて、世界が徐々にフェードアウトしていく。

「罪と言ふ罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、天津神國津神八百萬神等共に、聞こし食せと白す」

これが巫女のお祓いの力なのか？

にとりに粉々にされた時の流されていく感覚とは違う。

これは……消滅、か。

あつさりとした幕切れには、後悔や未練などといった感慨を抱く暇すらなかった。

ただ、己の存在が薄れていき、もうすぐに消えてしまうのだという実感だけがのしかかる。

（雛……どこだ……？）

せめて最後は彼女の傍で迎えたい。

意識を集中させて彼女を探すが、見つからない。

（雛……）

ひとり……か。

俺は、ひとりで消滅するのか。

彼女を残して？

この世界に生まれてから今までのことを想う。

……

……

……

（……）

「さあ、厄滅の儀はこれにて終了よ」

爽やかな声が言う。

「ひゃあ、もう限界。足がジンジンするよお」

愛らしい声が言う。

「ありがとうございます」

愛しい声が言う。

「これで今まで通りに過ごせるはずよ」

「よかったね、雛」

「ええ……」

「それにしても、なんだったんだろうね……あれは」

「誰かの意思か、突然変異か……」

まあなんにしても、と声が言う。

「あなたに憑いた異変は解決したわ」

異変。

その女は確かにそう断言した。

俺を異変だと言うのか？ 博麗の巫女よ。

俺がここにあるべき存在ではないと？

もし本気でそう考えているのなら……

残念だったな。お前に、俺は、祓えない。

「えっ、なに？ この気配……」

巫女の表情が一気に引き締まる。

さあ、宴を始めようではないか。

陸、異変解決☆巫女・霊夢　　〈後編〉

「危うく天に召されるところだったぜえええ」

寸前のところで踏みとどまれた。

これはまさしく愛の力!!　雛、愛してる!!

戻ってきた視力で周囲を見回してみると、全員の視点が俺に注がれていた。

……ん？

「今、喋った……よね……」

にとりが俺を指さして啞然としている。

……人を指さすだなんて失礼な娘さんだな。

(主に痺れている足に)　一撫で加えてやろうと彼女に一步踏み出す。

「うひい、こっち来るな」

恐怖の表情を浮かべるにとりが雛の後ろへと隠れる。

(……うん?)

今までになかった反応だ。雛でさえ怯えたように、にとりを庇いながら一歩下がった。

霊夢はというと、お祓い棒(御幣)を握った反対の手にお札を携え、きつい表情で構えている。

「あんた……悪霊なの?　自然現象にしては随分と人間じみているけど」

(人間じみる……?)

改めて自分の体を眺めてみると、黒いモヤであることには違いないのだが、人の形をしていることに気づく。

これは……そう。

「パワーアップ!!」

「は?」

「数多の試練を乗り越えて、俺はついに喋れるようになった。人の形をとることができた」

「なんだっていいわ。退治するだけよ」

そう言つて巫女が手に持ったお札を投げつけてきたが、それは俺の体をすり抜ける。

続いて発生した結界でさえ、俺を閉じ込めるには至らない。

「な、なんでよ。悪霊のくせに!!」

俺の本質は厄。そう、自然現象だ。

厄払いはできても、悪霊や妖怪退治のようにはいかない。

だからそう。博麗霊夢には俺を滅することは不可能なのだ。

「俺のターン!! パワーアップした俺の力を見せてやるぜ!!」

ニヤリと唇を吊り上げ、パチンと指を鳴らす。

すると戦闘態勢を取る巫女の後ろで、にとりが胸を押さえた。

「んっ、こいつまた……」

「いつまでも同じだと思ふなよ? ダブルパイスラー!!」

「なんだって……まさか……お前……」

慌ててにとりが背中に手を持っていき、苦悩の表情をした。

「なんで……うまく、くっついてくれない」

「もうホックを外すなんて面倒なこととはしない。切った、のさ。」

今の俺にはそんなことだつてできてしまう」

「いやああああああ、気持ち悪いいいいい」

室内にとりの悲鳴が響く。

悲哀と恐怖と憎悪の入り乱れた声だ。

ああ……この声を肴にさっきの酒を飲みたい。

「結構貴重品なんだからね!! そもそもなんであたしなのさ!!」

今の流れだと巫女の……を切るところでしょ」

「いや、サラシを切るのは……申し訳ないしな」

紳士はそんなことしません。

「なんでよ!! ブラの方が申し訳ないと思いなさいよ!!」

そもそも腋からチラチラ見えているサラシを切ったら、腋から覗く小宇宙（コスモ）が大変なことになってしまいそうだという配慮もある。

この作品はR指定のない健全な作品なのです。

「この変態!」

にとりが鞆から小瓶を取り出し、中に入っている妙な液体を俺に向かって振りかけた。

「こ……これは……」

「あんたの大好きな、厄取りホイホイ携帯版よ」

「好きじゃない!! むしろ嫌いな部類だ」

「これで身動き取れないわね。さあ出番よ、巫女さん!」

巫女がお祓い棒片手に仁王立ちしている。

満を持しての登場です。にとりに変わりました、代打、博麗霊夢。

「バツチ来いやあああ!!!」

巫女が俺の頭に狙いを定めて、フルスイング。

(それはピッチャーのセリフううう!!)

粉々に碎かれ、幻想郷中へと俺という厄が霧散していく。

めでたしめでたし……なんだが、俺は別のことが気になってしかたがない。

(もしかして、幻想郷はピッチャーがバットを振る文化なの??)

じゃあバッターは??)

あ、幻想郷で野球をする伏線ではありませんので、悪しからず。

☒、閑話休題

それから数日後、俺の復活を見計らうようにしてにとりが顔を出した。

手にぶら下げたお菓子（カップ饅頭）を雛に渡すと、心配そうに声をかける。

「雛、大丈夫？ 変なことされてない？」

「やれやれ。開口一番それか」

「あんたは口開く前にブラ外してくるじゃない」

「挨拶みたいなもの、かな」

最高の笑顔で親指をクツと立ててやる。

「気持ち悪い!!」

無言で服の中に手を入れるにとり。ほう。今日はフロントホックですか。大したものですね。

ギロリという擬音が似合いそうな視線でこちらを一瞥すると、にとりが持ってきた扇風機のような機械のスイッチを入れる。

ブウンブウンという音を立てて羽が回り始めると、作り出された風がにとりのツインテールを揺らした。

「いやあ、今日は暑いねえ」

雛に向けて扇風機の首をセットすると、その隣にとりが座る。少し気恥ずかしそうなふたりを、風が揺らしている。

「せっかくだしお茶にしましょう」

雛がお茶の準備をして、にとりの持ってきたお饅頭をふたり並んで食べる。

その光景に、俺は自然と……

「ささ、お兄さんも一緒にどうだい？」

イタズラっぽい笑みを浮かべて俺を誘うにとり。

(……………こいつ、なにか企んでやがる)

「ほうら、一緒にお饅頭食べようよお」

この程度の風量で厄が霧散するわけではないのだが、どうにもにとりの態度が気になる。

というか、明らかにおかしい。お兄さんとか呼ばれたことなかったぞ。

お兄さん……ああ、甘美な響きだ。

そう、これは決してやましい感情ではない。お兄さんとしての……そう、妹を想うような感情である。

「にーとりーい」

我ながらキモい声が出るものだ。

ニヤつきながら彼女の隣に陣取った俺であったが、その笑顔は一瞬で消える。

「おのれ……謀ったな」

この扇風機、一見すると普通の扇風機であるが、その実おかしな成分が……。

「ありやりや気づくの早いね」

この異様な心拍数の上がり具合、火照る体……そう、これは……まぢがいない。

「ペロツ、これは媚薬……」

だとすると一緒に風を浴びているにとりも……。

くそっ、妹が大人の女に変容している成長を間近で見てしまった兄の心境だぜ。

立派な誘い受けになりやがって（嬉し涙）

「違いますう。あとキモいのでそれ以上こっち見ないでくださいい」

「コホン、と咳払いをしてからにとりが扇風機を指さす。

「これは『厄流旋風くん（14）』だ」

やくながしつむじかぜくんじゅうよんさい。

自慢気に胸を張って解説するにとりは、楽しそうだ。

それを聞く雛も興味津々といった感じ。

うん、友情つてのは素晴らしいね。

「というわけで、雛の回転と逆回転の磁場を発生させることによって、このキモい厄にのみダメージを与えることができる風を作り出すことに成功したのである!!」

おおと感嘆の声を出しながらパチパチと手を叩く雛かわいい。

「いや、それは確かに俺の厄が散らされるすごい発明だと思っただけだよ……」

ひよい、と扇風機の前から一歩横に離れる。

「風が当たらなかつたら意味ないのでは？」

「あ」

にとりの傲慢な表情がフリーズする。

面白いのでそのまま待っていると、約5分ののち、しょんぼりした表情に切り替わった。

「本当にごめんね。次はもっといい道具開発するからさ」

あんなのと一緒じゃ雛がかわいそうだよ。

という言葉が続いていたが、聞こえなかったフリをしてあげよう。

「私は大丈夫よ。見られてるだけだから……」

「それが問題なんじゃない」

「私の厄だから、私には悪いことしないみたいだし」

「そうは言ってもさあ」

なおも心配な顔をするにとりに、ここはしっかりと答えてあげなければなるまい。

「いや、ほら……俺は雛の厄だから、傍に居ないといけないっていうか……義務っていうか……」

離れられない関係。そう、恋人みたいな!!」

「それはないわね」

「早く流されちまえ」

即答されてしまい消沈しながらお饅頭を食べる。

あ、これ美味しい。

そんなやりとりをしているとコンコンと扉が叩かれる。

来客のようだ。

「はい」

雛が小走りに玄関へと向かう。

捌、あーかい巫い女と みどりの巫い女（リズムよく）
〜前編〜

「とうわけで、あんたを消しに来たわ」

巫女がお祓い棒を肩にかけて、高圧的に宣言する。

「言うても巫女はん、あんたはん前に失敗してますやん」

「ああん？ 誰がなんだって？」

腕を組んでギョロリと斜め四十五度からの威圧的流し目（通称シャフ怒）

「いえ、なんでもないです」

つい委縮してしまう。

くそう、今度隙を見てあの脇に厄を挟んでやろう。

え……、厄を挟む?? 俺が挟まる……。

ちよつとイケない香りがプンプンするんだけど、描写的に大丈夫だろうか。

いや、やってやれないことはない。頑張れ、俺!!!!

バレないように、薄く伸ばした自分の一部を一路ユートピアへと……。

ゴオオオオ。

にとりの操作する扇風機（旋風くん）が俺の触手をダイレクトアタック!!

巫女の脇に到達する前に霧散してしまった。がってむ!!

「今日は助っ人が居るから、楽勝よ。楽勝」

自分の脇を賭けた高度な戦いに気づかなかった霊夢が、自らが入ってきた入り口を示すと、

そこには青い袴に緑色の髪をした巫女いた。

緊張した面持ちで中の様子をうかがっている姿が、なんだか小動物みたくて可愛い。

「あ……あの……よろしくおねがいしますっ」

霊夢と同じように脇を解放した巫女姿ではあるが、どちらかという
と清楚な印象を受ける。

「厄さんには特に恨みはありませんが、消えてもらいます」
ぎこちない笑顔で宣言する緑の巫女は、名を東風谷早苗と名乗っ
た。

その宣告だけで萌え死ぬに値するのだが、俺とて厄神さまの厄。
簡単に消えるわけにはいかない。

具体的には……

「ぶるぶる。ボクはいい厄だよお〜」

演技力で乗り切るしかない。

さすがに巫女ふたりは分が悪い。

「え？ あ、そうなんですか」

ほら見る。俺の完ぺきな演技力の前に、緑の巫女はたじろいでいる
ぞ。

「騙されないで、早苗。そいつは厄の風上にもおけない男よ!!」

赤い巫女が即座にフォローに入る。

……厄の風上ってなんだ？

「あと、どうしようもないスケベだね」

にとりによる援護射撃が俺に炸裂。

イラつとしたので、ホックを外しておこう。

「あらら、本当にどうしようもない人みたいですね。

では慈悲は不要ですね。

神の名のもとに消えてもらいましょうね。ああ、久々に合法的に人
……げふんげふん、厄を払えます」

うん？ 最後の文は聞き間違えかな？ なんか物騒な言葉が聞こ
えた気がする……。

「信じれば救われる……信仰は人のためにあるんだよね」

なんだか神に祈りたい気分だなー。

「人を不幸にする厄に、人権……厄権はありません」

それはあれだ。俺だけじゃなくてすべての厄に対する侵害じゃない
のか？

(いや、今この世界において、全ての厄は俺なんだけれども!!)

とはいえここまで貶められてしまつては俺も黙つてはいられない。

今こそ、真の厄の力を使うべき時っ!!

さあ、混沌(ケイオス)の滾々たる力よ、今こそ我より解き放たれんっ!!!

「ひゃあ!!」

早苗が素っ頓狂な声を上げてしやがみ込む。

……さすがにやりすぎたか?

「何したのよ、あんた」

霊夢が訝しげな眼でこちらを睨んでいる。

「流石にブラのホックを外すだけだと芸がないと思つたので……」

「で?」

「パンツの紐をゆるめました」

一瞬時が止まったような沈黙ののち

「最低だな」

「最低」

「それは流石に……」

「うわああああああ」

三者三様の声が発せられた。

「悪かつた。俺が悪かつたよ」

退治されそうだから自己防衛したのに、酷い言い草だ。

まぢやみ。

仕方がないので元に戻してやる。

「絶対ゆるさなえ!!!」

紐の強度が戻り気力も戻ってきたのか、守矢神社の巫女がメラメラとやる気を燃やしている。

現神人と謳われる巫女の実力は、霊夢とは違つた方向に秀でている。

本気でヤバいかもしれない。

誰かに助けを求めようにも、ここに味方はいない。

にとりと霊夢はお茶を飲みながら「やつちやえー」などと勝手な野

次を飛ばして、

雛はハラハラした様子で成り行きを眺めている。

あまりのピンチさ加減に、俺は……

俺は自然と笑っていた。

玖、風祝

メラメラと怒りに身を包む東風谷早苗。

異世界風にアレンジされた巫女服を身に纏ってはいるが、彼女の髪の色、そのベースカラーに思うところがないでもない。えーつとなんだったかな。

緑色……みどり??

あ、そうだ。霊夢と早苗で……

「赤と緑」

思わず口をついて出た言葉に、早苗の発するオーラが更に激しいものになる。

「誰が2Pカラーだって?」

はあ? とヤンキーのような声を出して早苗が語気を荒げる。

言っていないし。

「おほほほ、ルージュかどうかはその身をもって確かめるんですね」
笑顔ではあるが青筋立ててプルプルと頬が痙攣している。
どうやら知らずに地雷を踏んでしまったらしい。

つてかそんな笑い方をするキャラだったか?

怒りを鎮めてあげようと

「いや、ほら、たぬきの方かもしれないじゃない」

などともうでもいいフォローをしようとしたのだが、

「私は油揚げ派です。たぬきは地蔵しか能がないじゃないですか!!」

早苗はまくるように叫ぶと俺の声を掻き消した。

……そこは天ぷら派に謝っておきましょうね。

「というわけで、今からあなたの存在を消します。ええ、完膚なきまでに」

怒髪天を貫くとはこのことだろう。

ここまでガチギレしてる巫女と対峙するのは本望ではない。

霊夢が博麗の巫女として幻想郷の均衡を司る力を行使するのと違って、

外の世界から越してきた早苗はもつと純粋な力を使う。

奇跡（神）の力。

彼女の冠する風祝（かぜはふり）の名前の通り、彼女が自在に扱う風は俺と相性が悪すぎる。

にとりの扇風機もそうだったが、なんかしらかの力を秘めた風は、風でもって集まった厄を消滅させうるのだ。

こういう時は逃げるに限るな……って、あれ？

「逃がすわけないじゃない」

両手を上げ、腋をアピールしている赤い巫女。

「そのポーズは腋を舐めてくれってことでOK？」

「そんなわけないでしょ!! 霊符『夢想封印』!!」

霊夢が掲げているのは一枚のスペルカード。

気合の入った掛け声とともに展開される数多の札は、俺を中心として四角柱状の空間を作り出した。

前回俺を閉じ込めようとした結果とは一味違う。これは、世界そのものを隔離する博麗という力の概念そのものだ。

ここままで完璧な封印術を施されてしまったては逃げ場がない。

「このままあんたを封印してもいいのだけれど、それじゃ面白くないしね」

リベンジとばかりに心の底から面白そうに笑う霊夢に気を取られていると、背後からシャラリと早苗の手にした御幣が音を立てた。

「あなたに恨みはありませんが、私怨はあります」

轟々と、背景に炎でも燃え上がっているかのような威圧力をもって早苗が言葉を発する。

正直言ってる意味がわからない。

「私を貶めるだけでなく、あまつさえ……緑を……私のトレードカラーをバカにするなんて!!」

あれ？ 俺、早苗や緑色のことを馬鹿にしたっけ？

ねえ、これ完全に被害妄想じゃない??

「ルージュはジャンプ力だけで制御が効かない愚か者なのでバカにされても仕方がないですが……」

緑は緑でも、私はヨッ〇ー派なんですっ!!!」

あれ？ 今地味にU〇Aの話してる？ ハイ。アタシキヤ〇リン。ちよつと何言ってるかわからない。

わからないけど

「わかる!! あの繁殖能力がありながら〇ースター島を支配できないなんて、ぼんこつすぎて恐竜族の風上にも置けない感じがたまらなく可愛いよねっ!!」

(話を合わせなければ、確実に消される!!)

と思い援護射撃を行ったはずんだけど……

「黙れ!!!」

ブチンと何かの切れる音が聞こえ、早苗の霊力が怖ろしいほどに上昇する。

神聖な風が早苗の中から溢れてくると、緑の髪や巫女服がはためいた。

その風の中で小さな口で祝詞を唱えている早苗の目にはすでに一切の余念がなく、

トランスしたように惚けた表情は、古来より神懸るとされている巫女のそれであった。

「天津風、国津風、この世界に吹きすさぶ普く総ての風よ。祝れ。はふ

(ほお) れ、はふ (ほお) れ。

……葬 (ほお) れ」

彼女の祝 (呪) 詞が完成していく。

神懸った力であれば厄を滅することは叶うのだろうか。

それこそ奇跡なのだが、奇跡を司る東風谷早苗になれば或いは可能なのかもしれない。

早苗の風が俺の厄を散らしていく。

俺という本体から散らされた厄が、分散することなく昇華していくのがわかる。

もし……もしも厄がなくなれば、彼女は幸せになれるのだろうか。

(俺はどうしようもない厄であったが、君への想いは本当だったんだよ)

ちらりと雛を見る。

例えばこの時彼女が安堵の表情を浮かべていたのなら、俺は躊躇わずに成仏したことだろう。

「……………」

けれどこともあろうに、彼女は微笑を浮かべて、小さく、誰にも聞こえないような言葉を紡いだのである。

彼女の口の動きからその言葉を察してしまった俺は……

俺は……………

俺の存在はその場にいる全員の前から綺麗に消えた。

拾、追憶と風習と……

それははじめ、誰かが気まぐれに紙で作った雛人形だったのだと言う。

自らの子どもに似たてたそれに、不幸を背負わせて川に流す。

陰陽術や呪術を連想させるその儀式は、あつという間に幻想郷の村中に広まっていった。

「厄を背負わせて流すヒトガタ」

時代は流れて……。

その行為の呪術的な面を恐れてなのか、依り代に肩代わりさせる行いの後ろめたさによるものなのか、はたまた残酷な何かがあつたせい
か、

「流し雛」という存在そのものが忌諱されてしまい、いつしかその風習も終えてしまう。

そして誰も雛を流さなくなった。

けれども既に、厄を流すために厄を背負わされた人形は、小さな信仰とも呼ぶべき因習を手に入れてしまっていた。

負の信仰を得てしまったヒトガタは、それに相応しい姿で己の仕事をこなすことになる。

紙で作られた流し雛は、誰が織らなくても時期が来ると自然と川を下っていく、人里に厄をもたらした。

川を下ってくるその姿を見ると、人々はその姿を見ないように目を伏せ、自分とは縁が結ばれないようにと願う。

厄は流れ続け、切られ続けた縁の淀みが更なる厄を生み出す。

紙で織られた雛人形は、いつしか球体関節としての人形になり、徐々にその姿を大きくしていく。

誰からも無視されればされるほどに、人々の信仰（恐怖）心が大きくなっているようだった。

今では人と変わらない姿にまで大きくなってしまっている。

容姿だけではない。心も少しずつ成長していき、人と変わらない感

情や思考を持つに至ったのだ。

その頃には彼女のことを雛人形と呼ぶものはいなくなっていた。口に出すのも憚られる「厄神さま」として忌避されるモノになった。そう。それは彼女にとつての不幸であった、と俺は思う。

誰とも関係性を結べない厄神さまに、果たして自我が必要あったのだろうか。

否応もなく雛の周りに厄は集まり、そしてそれがどのような意味を持つか知っていながらも彼女は厄を流す。

それが彼女の役割で存在意義なのだから、疑問を持つことすらせず、にそうせざるをえない。

けれども流れた厄は人里へと降りて、人々を多かれ少なかれ不幸にする。

その生まれた経緯がどうであるにせよ、

彼女という存在は「一方的に人に不幸をもたらす悪い妖怪」となってしまうのだ。

「厄」という概念を作りだし、それを一方的に背負わせる「存在(モノ)」を作り出しておきながら……。

勝手な話だ。

……さて、ここからは俺の話だ。

ある日気が付くと俺は鍵山雛という妖怪の纏う厄になっていた。

流し雛に人格が生じたのだ。厄そのものにそれが起きてもなんら不思議はない。(まあ、ちよつとした理由はあるのだが)

「厄」と一言で言ってみたとところで、現象としての厄を説明するにはなかなか難しいところがある。

誰かを不幸にする因子とでも言うべきだろうか。

それ故に彼女に関わろうとする奇特な者は少なかった。

自我を持った俺は、意識を持つひとつの個であり、また無限に集散する集合体としての厄でもあった。

鍵山雛がひとたび厄を流すと、俺の意識は千々に刻まれ幻想郷中に撒かれていく。

そして流れ着いた先々で、意識のないままに誰かを多かれ少なかれ不幸にして、また鍵山雛のもとへと戻っていく。

その繰り返し……。

その中で、幾千幾万にも刻まれた俺の総てがそれら不幸を観る。

その過程でこの幻想郷の歴史、人、妖、果ては神まで。様々なことを見聞き識り、経験した。

彼女のもとへ還り、意識を取り戻すほどに集積されると、また流される。

不幸と、不幸と、不幸の繰り返し。

えんがちよマスター。

いつからか……いや、意識が芽生えたその瞬間からだっただかもしれない。

誰からも「縁が千代（えんがちよ）」に切られてしまう彼女を、俺は愛おしく思った。

……救いたいと思った。

拾壹、喪失感

件の厄が消滅してから2カ月が経った頃、鍵山雛は河城にとりのもとを訪れていた。

雛の姿を見て川の中から「やあ」と手を上げて挨拶したもの、にとりの表情に覇気はない。

川の中にぽつんと佇む岩―雛の指定席―に腰かけ、スカートをたくし上げると真っ白な足を脚を水に晒す。

晩秋の水はさぞ冷たかろうに、その表情は一切変わらない。

「最近元気ないね」

「そんなことないわ」

なんとなしに、雛がにとりに話しかけたが、にとりは即答する。

その問いかけの意味することがわかっているだけに、意固地になっているのだ。

それから……少しだけ逡巡すると、にとりは諦めたようにため息を吐いた。

「まあ、楽しかったよ。最低なヤツだったけど……暇しなかったのだけは認めるよ」

バツが悪そうに頭を搔くと、にとりは水から上がり雛の隣に腰かける。

「たまにね……あの人がすごい優しかったのよ。本当よ？」

「嘘でしょ？」という反応を見せるにとりを気にせず、雛は会話を続ける。

「喋るようになってからは、たくさんお話したわ。だいたい彼が喋るだけだったけど」

「それって迷惑だったんじゃない？」

「そんなことないわ。流されてる間に見聞きした、色々な楽しい話を聞かせてくれた」

そう言うと雛は、どこか嬉しそうに水の流れる先を眺める。

初めて見せた雛の表情に、にとりの胸が少しだけ重くなる。

(彼を祓わせたのは、あたしだ……)

私はもしかしたら、雛のことを理解していなかったのかもしれない。

本気で嫌がっていたわけじゃなかったのかもしれない。

もつと雛と会話してから動いても良かったのかもしれない。

——なにより、彼女の孤独を理解できるのは、悔しいけどあいつだけだったのかもしれない。

仮定に仮定を積み重ねた理論は、しかしながら研究者肌のにとりに考えれば考えるほど重く押し掛かる。

「ごめん、雛……」

「なあに？」

「悪いのは、あたしだ」

深刻な顔をして謝るにとりに対して、雛の表情は軽くて明るい。

「今となっては、もはや懐かしいわね」

努めて明るい雛の言葉に引きずられて、にとりも少しだけ明るさを取り戻す。

「あんなヤツでも、いなくなると寂しいものだね」

「あら、もう一度会いたいなの？」

「……………うん」

「ついにデレたな!! このダブルパイスラーが!!!」

懐かしがっていた声が、どこからか聞こえてくる。

どこからか? いや、すぐ近く……雛の影からだ。

「うわっ、いつの間に!! ってか、生きてたのか!? ああ、もう、呼吸するようにブラのホック外すな!!」

「あら、にとり楽しそう」

くすくす口許に手を当てて笑う雛。

「雛……もしかして知ってたの？」

「ええ、だって、私の厄だもの」

「ああああー、ハメラれたー」

今しがたの自分の発言を思い出して、にとりは頭を抱え悶絶している。

「女の子がそんな下品なこと言っちゃダメです。ただちよつと今後の参考の為にそのハメられた経緯を聞いて」

「下ネタじゃねーよ!!!」

「へいへーい、バッチこいバッチこい」

ぐにぐにと、厄が八の字を描くような奇怪な動きをして、にとりを挑発する。

（現世の皆様にもわかりやすく言うと『デンプーローロール』のような動きです）

にとりは背中のリュックから釘バットを取り出すと、

「ピッチャーびびってるうううう」

掛け声とともに一閃、腰の入ったスイングを厄にお見舞いするのであった。

厄の霧散した後、川には厄神様のかわいらしい笑い声が響き渡る。

「もう雛、笑い事じゃないよお」

「ごめんごめん。嬉しくて」

「……そうだね。その気持ちは……まあわからないでもないよ」

雛につられて、にとりも笑いだす。

日が暮れるまで、少女たちは語り合う。お互いの距離をもっと縮めるために……。

拾貳、ていーぱーていー

「がってーむ!!」

ようやく二人の仲が深まってきたっていうのに!!」

復帰早々、にとりの手によって流されていた俺は、数日掛けて再び実体化していた。

これでやつと……ぐへへ、と思わず天使のように清純な笑みが漏れる。

これでやつと、彼女の身体を撫でまわすように纏わりつくことができきるのだ!!

厄神様の厄だから仕方ないね!! だって厄神様の厄なんだもん。

ビバ不可抗力!!

……というのに、だ。

どういうわけか一定の距離以上に彼女に近づくことができなくなっていた。

「あれ……おかしいな。あれ?」

まるで見えない壁でもあるかのように、俺の体が遮られてしまう。

「ふふん、甘い。

私がこの2カ月、なにもして来なかったと思って?」

不敵な笑みを浮かべてにとりがクツキーをむさぼっている。

テンション上がりすぎたのか、「げほっげほう!! ぐげえ、変なところ入ったあ」と女の子らしからぬ咽せ方をしている。

すかさず雛がお茶を淹れると、一気にそれを飲み干した。

「あんたが変なことしないように、私も日々進化しているってことよ!!」

相変わらずテンションは高いまま、にとりがテーブルの上に置いてあるスプレー缶を手を取った。

「これが河童の化学(ばけがく)力の総力を上げて作り出した一品、対厄スプレーよ!!

これを噴霧した相手に、あんたは近づくことができなくなるわ」

えへんと胸を張って掲げられたスプレー缶のラベルには『汚物は消臭くん』と書かれている。

……相変わらずのネーミングセンスだ。

けどその名前だと、スプレーをかけられる雛が汚物と言うことになりはしないか？

まあ、なんか楽しそうだからそのあたりは黙っていてあげよう。俺、圧倒的大人の対応。

とはいえ、偉そうにふんぞり返っているにとりを眺めているとイタズラ心が芽生えてしまうのも事実で、俺はいつものようにブラのホックを……

「な、なんだと!!」

にとりにも近づけない、だと。

「当たり前じゃない。もうやすやすと私に触れることもできないんだから」

と、高らかな勝利宣言。

ぐぬぬ……かくなる上は……

「雛ああああああ。俺は別に悪いことをしようと思つて雛の傍にいるわけじゃないんだよおおおお。」

親を慕う子どもみたいな感じで……つていうか、俺は雛の厄なんだから正真正銘の子どもなんだよおおおお、ばぶうううう」

奥義泣き落とし。

土下座の体勢からの上目遣いには、これまで落ちなかった女は居ない。なお、初めてする行為です。

「これぐらいの距離がちようどいいのかな、つて思わなくもない、かな」

困惑しながらノーセンキューを繰り返した雛。

俺の心はスタボロだよ……。

まさか、えんがちよマスターにえんがちよされる日が来るとは……厄神様に近づけない厄とはなんなんだ……。

「いじいじ……」

言葉を出していじけていると、見かねて雛が助け舟を出してくれ

た。

「別にね、一緒にいたくないわけじゃないのよ……。それににとりも、適切な距離は必要だろうって、こういう風にしてくれたのだから」
「そうだ。今回にとりが作ったのは、厄を流す装置ではなく、距離を取る装置だったのだ。」

それは一緒にいることを肯定してくれていることに他ならない。
もしかするとこの装置は雛の……。俺の……。悲願でもあるのかもしれない。

厄など纏っていないくたつたって……

そう、彼女は、鍵山雛だ。それでいい。

「なに笑ってるのよ。気持ち悪い」

クツキーを頬張るにとりの見下したような態度も、可愛く見える。
彼女は彼女のやり方で、いつだって戦っているのだ。

「……ねえ」

「なんだ？」

雛がティーポットに新しいお茶を淹れに席を離れた隙に、にとりが話しかけてくる。

「結局、どうするのがいいのかしら」

「このまま厄という存在が独立する、……。つてのは解決にはならないだろうな」

「そうね。だってあなた、現象だもの。」

現象の発生には原因が必要。あなたは鍵山雛という原因を失うことになる。

それはあなたか彼女の消失に繋がるわ。

恐らく……。消えるのは……」

「それでも、彼女が全ての恨みを買う必要なんてないだろ。」

今、この瞬間だけでも……」

「そうね……。あんた、優しいね」

なんかしんみりした話をしたけれども、

いや、そもそも俺が雛から離れなきゃいいんじゃないかね????

そう思いなおし、スプレアの効能が切れる瞬間を今か今かと待ち続けるのであった。

拾参、ドキドキ☆お風呂はぷにんぐ（にゆるりもあるよ）

「で、いつスプレーの効果切れるんだ？」

昼下がりのお茶会も、既に夕暮れに差し掛かっている。

だというのに、一向に雛に近づくことが出来ない。

おかしいやん。おかしいやん。

なんで雛の厄たる俺が、雛に触れないんだ!!

こんなの絶対間違ってるよ。

「いいぞまだね」

忌まわしいスプレーの開発者が絶望に打ちひしがれる俺を鼻で笑う。

（覚えてろよ……俺はこの愛の試練を乗り越えて、かならず雛に纏わりつけてみせる!!）

思えば実体化する前の、彼女に絡みついていた時期が懐かしい。

随分と遠くへ来たものだ。いや、近づきたいんだけど……。

地団駄を踏む俺と、それを眺めるガールズふたり。

そうこうしているうちに、陽も完全に暮れてしまったようだ。

雛が心配そうにとりに声をかける。

「あちやー、こいつの無念そうな顔見てたら、時間が経つの早すぎて気づかなかったよ」

にとりが笑いながら言う。こいつ性格悪すぎだろ。

「なんでそうなったか自分の胸に手を当てて、よく考えてみなさい。

このセクハラ魔人」

「セクハラ？ なんのこと？」 純真無垢な眼差しで首をかしげる俺。

「ひなー、追加でスプレーかけてあげるねー」

「おい、こら、やめてください。後生ですから」

土下座して己の非を詫げる。

ぐびひ、と陰険な顔をして勝ち誇るにとりに、雛が優しく語り掛ける。

「今日は泊っていく?」

「いいの?」それを聞いたにとりの顔が輝く。

「大歓迎よ」厄を纏っていないからこその発言なのだろう。

にとりに気を遣う必要もない雛は心底嬉しそうだ。

「ひゃっほい!! パジャマパーティーだ!!!」

みんなで夕飯、みんなでお風呂、最後は川の字になって就寝だあ!!!」

「近寄れると思ってるの?」

低い声でつぶやくにとり。ちよつと声が怖いんですけど……。

困ったように笑う雛も、断固拒否の空気を纏っていた。

ぐぬぬ。

しかし、俺は紳士だからな。ここは素直に引き下がってやろう。

なんてな!!

ふたりしてお風呂に入っている時、そう、それはスプレーの効力が流される刻限(とき)!!

影から覗くのも悪くはないが、散々お預け喰らわされていたのだ。

もう我慢できないっ!! とケロ○グの虎ばりに勢いよく脱衣所の

扉を開け、脱ぎ畳まれた衣服に目もくれず、神秘と魅惑を兼ね備えた

その先の空間へ!!

やったね、厄ちゃん大勝利!! 家族が増え……

「そう来ると思ってたよ!!」

迎えうつは水着を身につけ、水鉄砲を握りしめるにとり。

「ちくしよおおお!!」

お風呂で水着はマナー違反だ!! 訴えてやる!!

いや、待て。雛の赤くてフリフリの付いたビキニ姿、超セクシーでぐっじよぶ!!

にとりも機能性を重視した紺の競泳水着に、鞆を背負ったダブルパイスラースタイル。

これはちよつと……

「マニアックすぎやしないか?」

「うるさいっ」

くくっ、そんなに俺と水遊びがしたいのかなっ!!

俺はアワアワで石鹸な遊びでも一向にかまわないんだぜっ!!

「それっ!!」

にとりは手に持った水鉄砲から勢いよく水を打ち出すと、俺の顔に直撃させる。

「ふっ、それくらいで……んがっ!!」

にとりの放った水が、俺の顔に痛みをもたらしたかと思うと、顔の一部を溶解させた。

なんだ、この水は……。

「対厄超濃度光化学水照射機、名付けて『みずてっぽうくん』だよ」

いや、確かに合理的ではある。

俺は水に流される性質を持っているのだから、そこに対厄属性を付与されてしまつては為す術がない。

「俺が悪かった!!」

ここまで来て流されるわけにはいかない。

なんとかしてあの銃を無力化しなければ……。

「早く出て行きなさいよね」

土下座スタイルで周囲を探る。

と、俺の視界の端にある黄色い物体が目にとまった。

「出て行かないなら……」

せやっ!! これだ!!

「もういっちょよ!!」

「バリアーシールドっ!!」

風呂桶を手に持ち、水鉄砲を防ぐ。

「ぐぬぬ、そんなんで防がれるとは……改良の余地がありそうね」

くはははっ、この勝負、我の勝ちなり!!

さすがはケロン!! お風呂の神さま!!

勝ち誇りながら、遠慮のない視線で敗者の姿を目に焼き付けようと、にとりの攻撃を防ぎながら身を乗り出す。

(いや……もうちよつと、光の加減で、大事な部分が……くそっ、見え

ない……だどっ!!)

光の乱反射によって顔を真っ赤にしてお風呂に沈んでいる雛の水着がよく見えない。

(まさか、これも河童の科学力なのか?)

ハツとしてにとりを見ると、やはり偉そうに胸を張っている。

ガツテム!!

「早く出てけ」という罵声を浴びながら、お風呂に浮かんでいる雛の前髪を未練がましく眺める。

そう言えば髪を洗う時はどうするのだろう。いや、髪を解いても後ろに流さなければいいのか。

それとも……その時ばかりは運命の女神にも後ろ髪が発生するのだろうか。

豪将アキレウスのアキレス腱みたいなの？

「ふむ、これは興味深いですねえ」

「あの……恥ずかしいから、もう出て行って」

か細い声で恥ずかしがる雛。

その前髪を洗ってあげようかとも思ったけど、流石に嫌われそうな空気になったので外に出ることにした。

このあとパジャマを着たふたりとのイベントも待っていることだしな!!

なお、その後マジ切れしたにとりに「バッチ来い」されるし、雛は数日間口をきいてくれませんでした。

うーん、めでたしめでたし!!

拾肆、襖（前編）

前回のこともあり、脱衣所・浴室に例のスプレーを散布されまくった俺は、雛の入浴時間を一人で悶々と時間を潰している。

（いや……正面からがダメなら、外から回り込めば……或いは!!）

そう思い、ふたりの愛の巣から外に出て、浴室の窓から中を覗き込もうとした途端……

ガンツ!!

頭に大きな痛みが走った。

「いっつううう」

頭を抑えながら、頭上から落ちてきたものを見ると、カップの絵の描かれた巨大な板であった。

瞬時ににとりのニンマリとした顔が脳裏に浮かび、妄想の彼女が「どうよ、河童のマークの征厄板の威力は!!」などとほざいている。

……ファンファーレが聞こえてきそうなネーミングセンスだ。我が妄想ながら頭痛が痛い。

「なにしてるの?」

見上げると、ジト目をした雛が窓から顔だけ出してこちらを覗いていた。

「なにつて……散歩ですよ、散歩。ついでに不審者がいないか見回りをですね」

なぜか敬語の俺。決してやましいことがあるから礼儀正しいわけではないぞ。うん。

「ふうん」

相変わらずジト目の雛（超絶かわいい）がピシヤリと窓を閉める。鍵もかけてしまったようで、摺りガラス越しには何も見ることができない。

しかしパシヤパシヤと流れる水の音に妄想は否応なく膨らんでいく。

これはこれで……アリだな。

先ほどの雛の表情を思い出す。

普段とは違った雛の表情を見られたことに、少しだけ満足して、夜の森へと歩を進める。

彼女にああいった手前、少しくらい散歩してから帰った方がいいだろう。

そんな暢気なことを考えていた。

「あなたが厄ですか？」

突然背後から声をかけられた。

振り向いてみれば、笠を被った僧侶がひとり。

月の光を弾くように輝く髪は、金から紫へとグラデーションがかかっており、あふれ出る魔力の強さが滲み出ているようだ。

聖白蓮。

できれば対峙したくない相手であった。

摂理を利用しながらも、現象を超える力を引き起こすのが魔法であるならば、摂理の内側にある厄には抵抗し難い。

「あなたが厄ですね？」

先ほどと同じ質問には、今度は有無を言わさぬ迫力があつた。

ヒリつく空気の中、首を縦に振るのがやつとだった。

「博麗の巫女から聞いています。」

たいそう……その、煩惱に溢れる行いをしてるとか……」

ここでいつものような“挨拶”でもするべきだったのかもしれないが、そんな冗談が通じる相手にも見えない。

いや、今まで冗談が通じた人なんていなかったけど。

「俺は厄だから、誰かを不幸にしなければならぬ」

諭え自我を持ち、集約された厄であろうと、そこからは逃げられない。

い。

こればかりは厄の厄たる所以なのだ。

「自我のある不幸ですか。それは摂理に反します」

「摂理を曲げる魔法使いが面白いことを言う」

精一杯の皮肉を言うと、女僧は優しく微笑んだ。

「ええ。だから巫女は私に依頼したのかもしれないね」

白蓮の手に持った錫杖が大地に落とされ、シャンと一際大きな音が

鳴り響く。

——私は、あなたを、消しに来ました。

白蓮の顔から笑みが消えた。

彼女の綺麗な髪がブワツと逆立ったかと思うと、空いた方の手がゆっくりと前へ伸ばされる。

放出された魔力は呪文すら唱えなくとも俺の身体を束縛していた。

こんなのは魔法ですらない。ただの力だ。

動けない。

「俺は現象だ。消し去ったところですからすぐに復活できる」

恐怖を隠すように強がってみせる。

「いいえ、あなたという概念はもう集約されません。そのようにします」

ゾクリと背中に冷たいものが走る。

本気だ。この僧は本気で摂理を捻じ曲げようとしている。

魔法とはかくも世界に干渉できるものなのか。

いや、彼女が特別なのだろう。魔力濃度の濃い魔界に封印されても正気を保ち続けたというのだから当然か。

「あなたは欲のままに生きる度し難い存在です。

それとも……あの子を本当の意味で救えるものだと思ってるのだとしたら……」

「思い知らされてるよ。

俺は……俺では、彼女を、救えない」

ここで終わりか……。俺は諦めて目を閉じた。

まだ何も果たしてはいないが、そうあるべきなのかもしれない。少なくとも、俺は……。

拾伍、禊（後編）

「あの……私の厄が、どうかしましたか？」

この場に似合わぬ穏やかな声が介入する。

緑の髪に赤いドレス……雛だ。

濁ききつていない髪に、上気させた頬。

何かを感じ取って、走ってきたのだろう。

俺と白蓮の間に入り込んだ雛に、白蓮は笑顔を向ける。

「ええ、迷惑な厄は消してしまおうと思ひまして」

笑顔が怖い。目が笑ってない。

「……困ります」

「困る？ 困っていたのはあなただと伺っていたのだけれど」

聞いてた話と少し違うようね……。

そうつぶやく白蓮は、値踏みするように俺と雛を見比べている。

「私は……別に……」

「けれどね。周囲の人たちは困っているんじゃないかしら？」

その厄が何をしてきたか、あなたは知らないわけではないはずよ」

「それはそうかもしれないませんが……」

「あなたはその厄が無くなったところで、何も困ることはない。

日常が戻ってくるだけよ」

「……」

「さあ、そこをどきなさい」

「……」

何ごとかを雛がつぶやく。

「どきなさい」

諭すような口調の白蓮。

「どきません」

両手を広げ、俺を守るように立ちはだかる雛。

白蓮は少し驚いたようで、小さくため息をついた。

「どうしてかしらっ」

「厄は……人を不幸にするものです。」

でも彼は……少なくとも、誰も不幸にはしなかった」

「それはあなたの主観よ。」

彼は悪さを働いた。それが全て」

「そんなことは……」

「なあ、おい。尼さんさ……」

溜まらずふたりの会話に口を挟む。

別に雛が俺の価値を認めないなら、消されてしまっても仕方がないとは思っていた。

が、こうなると話は別だ。

なにより、この化け物じみた尼僧から、雛に危険が及ぶことは避けなければならぬ。

この際、ハツタリだろうがなんだって構わない。彼女の気を変えなければ……。

「気にならないか？ 俺という存在が生まれた理由が」

「さして気にはなりません……」

それはあなたがこのまま存在していた方がいい理由になるのですか？」

冷徹な目に、俺を……俺という存在を見透かされているようだ。

「少なくとも、まだ消えない方がいい理由くらいにはなるかな」

「それは……」

雛と俺を交互に見比べる白蓮。その値踏みするうな目線が心臓に悪い。

シャン。

再び錫杖が大地に打ち付けられると、俺の拘束が解かれる。

「……わかりました。」

どのみち、あなたの厄の使い方は煩惱に塗れてはいるけど邪悪ではない。

あなたには、それ以外なかったのでしょうね」

小さくひと言、不器用な方ですね、と付け加えて、白蓮は踵を返す。

「あ、あの……」

恐る恐るといった感じで雛が声をかける。
振り返りもせずに白蓮がそれに応える。

「今日は見逃してあげます。」

度し難い厄のお方、仏門に下る気になりましたら、いつでもおいでください。

歓迎しますよ?」

そう言い残して、妖怪の森の暗闇へと白蓮は消えていく。
後に残されたのは茫然としている俺と雛。

「大丈夫?」

雛が振り返る。拘束されていた俺を心配してくれているのだろう。

「ありがとう。結構本気で消されるところだったよ。」

「……けど、よかつたのか?」

彼女は俺という存在から解放されることだつてできたのだ。

どうしようもなく、度し難い厄という存在から。

「あなたはちよつと困つた人だけど、悪い人じゃないもの。」

だから、居なくなるよ……さみしい」

「雛ああああ、怖かつたよおおおお」

ここがチャンスとばかりに、泣きながら彼女の胸に飛び込む。

火照つた身体からは石鹸の香りが濃く漂つており、彼女に抱き着いているという実感が、胸に歓喜の雨を降らせる。

(うっひよおおおお、ここは天国じゃああああ!!!)

もう俺はここを住まいにするぞ!! 誰にも渡さんのじゃあああ

!!!)

「そうね……怖かつたわね」

慰めてくれる彼女の手は震えていて……。

もしかしたら彼女も気づいているのかもしれない。

集約された厄というものは、本来散らさなければならぬ。

それを濃厚な密度のまま集約し続けるリスクというものに。

俺は悪事を働く。大なり小なり、何か悪いことをしていなければならぬ。
それは厄くない厄に存在価値はないからだ。

厄を纏わぬ厄神様を存在させておくほど、幻想郷は甘くない。
だから、俺は厄であり続けなければならない。

けれど……
けれど……

もし、彼女の厄が、誰をも不幸にすることのない未来があるのなら

……

もしも、彼女とともに歩める、そんな道があるのなら……

頭を振る。

希望なんて抱かない方がいい。

俺が誰のために、何のためにここに在るのか、ゆめゆめ忘れるな。

俺はただ彼女の幸せを祈り、願い、行動するだけだ。

「帰ろう?..」

どこか寂しそうにつぶやかれた雛の言葉。

その意味に俺は気づいていなかった。

拾陸、憂悶

……最近、雛の様子がおかしい。

遊びに来たにとりが一人になったタイミングで打ち明けてみる。

「は?」

相変わらず冷たい反応だ。だが、無言で続きを促してくるあたり、雛のことを心配しているようだ。

「どうも、避けられているみたいだ」

深刻な声音でそう告げたのだが「は?」と同じ反応が返ってくるばかり。

直後ふつと鼻で笑う辺り、馬鹿にされてる感じが追加されている感がある。

イラつとしたのでお返しに靴下のゴム紐を厄の力でゆるめてやる。

よれよれになってしまった靴下を、椅子に座るにとりが嫌そうな顔をして脱ぐ。

そうそう、これ!! これが見たかったのだよ!!

すらりと綺麗な三角を描く脚線。悪態をつきながら苛立たしげな顔をして伸ばされる手。

靴下を脱ぐために上げられた足はスカートの奥の禁足地を容易に

……。

「甘いっ!!」

あとちよつと、というところでのとりの投げたスパナが俺の顔面にクリーンヒット。視界が黒く染まった。

なんでそんなもん常備してるんだ。普通の人間だったら流血沙汰ですよ??

「全く、油断も隙も無い」

「はいはい。悪うございました」

そう言いながらスパナを拾い上げ、にとりに返す。

「ん。ありがと」

スパナを手渡しするその瞬間に生じた隙を、俺は見逃さない。

にとりが反対側の手に持っている靴下を、スパナと交換で奪い取る。

「あっ」

くんかくんか。

まだ温もりの残るそれは、長靴のゴムと油の混じったような、独特の匂いをしていた。

そしてその奥には雌を感じさせる女の子独特の……。

「ふむ。やはりちよつと汗の匂いが染み込んでいるな」

「ちよつとお!! なにしてんのよ!!」

「テイステイングだ」

なんならこの後、口の中で酸素と一緒に転がすまでである。

「きもつ、返しなさいよ!!」

「捨てるものを有効活用して何が悪い」

「悪いに決まってるでしょ!!」

にとりは俺の手から靴下をはぎ取ると、ポケットに仕舞い込む。

自宅で処分する気か。くそつ、こんなことならこのゴミ箱にでも捨てさせておくべきだったか。

「それで、あんた元々避けられてたと思うんだけど?」

にとりが例のスプレーをこれ見よがしに自らに振りかけている。

うーん、この恥ずかしがり屋さんめ。

「にとりが居ない時は、いつもイチャイチャパラダイスしてるんだぜ」

「はいはい、妄想おつおつ」

ぐぬぬ……。間を置かずに否定されると、ちよつと寂しくなってくる。

ただでさえ最近雛が構ってくれないって言うのに……。

「あと、なんか辛そうだ」

「そう……やっぱりあんたもそう思う?」

それきり、にとりが黙り込む。

何かを考えるのだろうか。

……明確に避けられていると気付いたのは、あの尼僧の件以降だったように思う。

雛なりに何か考えがあるのだろう。あれ以来、雛は厄を流そうとしなくなった。

恐らく、そのことが彼女に無理を強いているのだろう。時折隠しきれずに表に出てくる苦悶の表情が、それを明確に物語っている。

その後雛が戻ってくると、この話は切り上げられた。

「悔しいけど……今回は力になれないわ」

帰り際、ぼつりとにとりがつぶやく。

「これはあんたたちの問題だから」

あわよくば無理やりにも流してもらおうと思っていたのだが、こ
うも冷たく突き放されてしまうと落胆を隠せない。

「まあじっくり話し合ってみなさい」そう告げるにとりの顔には無理
やり作られた笑顔が浮かんでいて、元気づけようとしてくれているの
だろう。

「そうしてみるよ。あんまり真面目なのは性に合わないんだけど」
「だろうね」

クスリと笑った彼女であったが、すぐに真剣な表情に戻る。

「けど、私は彼女の味方だから……。いざとなったら、躊躇わずに彼女
を選ぶわ」

「ありがとう」

「全く。バカなんだから」

吐き捨てるようにそう言うと、にとりがとぼとぼと帰っていく。

彼女なりに気を遣ってくれているのが身に染みる。

そうだ。これは俺と彼女の問題だ。

誰かがどうこうしたところで、救われようがない。

やるせない気持ちだが、胸の奥に轟々と渦巻いている。

厄を流さなくなつてからの雛の体調は、見るからに悪そうだ。

妖怪としての役割に背いているためなのか、はたまた俺という存在が厄を溜め込みすぎた影響なのか。

厄を溜め込む厄神様と、人格を持ってしまった厄。

わけを話して、にとりに無理やり流してもらうことも可能だったろう。

けれど、それではダメなのだ。

応急的に厄は散らしたところで、雛が「厄を流さない厄神様」という存在であることに変わりはない。

この幻想郷というカラクリの内側において、雛が危険な状態にあるのは明白であった。

雛の寝室の前に立つ。

こここのところ、彼女はずっと引きこもっている。

今すぐに入りたい気持ちを抑えながら、扉越しに優しく声をかける。

「雛、調子はどうだい？」

「……別に」

今にも消えてしまいそうな声が、やっこのことで扉を越えてくる。

「やっぱり、俺を流さないから……」

「……関係ない、よ」

弱々しく返された言葉が、かえってその関係を肯定しているようだ。

できるだけ焦った感じが出ないように、優しい声音を心がける。

「な？ 俺を流してくれ。そうしたら……」

「ダメよ。あなたはもう流さない」

この話はここで終わり、とばかりに言葉を遮られる。

「けど、このままってわけにはいかないだろ？」

なあ、雛。話を聞いてくれ」

語尾がどうしても強くなってしまう。

彼女の真意がわからない。俺を流せばいいだけの話なのに……。

「ダメよ。私には、もうあなたを流せない……」

「……雛？」

「あなたは流されている間も、意識があるのでしょ？」

何百何千にも分かれたれて、自らの意志とは関係なしに人々を不幸にして、たくさんの辛い思いをして帰ってくるのでしょ？」

「……だから、私はあなたを流さない」

静かに、けれどはつきりとした意志でもって、彼女が告げてくる。

「ごめんね……ごめんね。」

私の厄なのに、ずっと辛かったのでしょ？」

そう告げる彼女の声が震えている。

……雛が泣いている。

俺なんかの為に、彼女が泣いてくれている。

ああ、俺は一体何のために……。

もうガマンなんて出来ようはずがない。

元々実体のない俺に、扉など意味を為さない。

「入るよ」

扉の向こうに声をかけると、返事も聞かずに俺たちを隔てる板を通り抜ける。

眼を充血させた雛が、ベッドに腰かけていた。

一瞬こちらを見る雛であったが、すぐに目を逸らす。

つかつかと彼女の前に歩いていくと、俺は彼女を正面から優しく抱きしめた。

「ありがとう。けど、もういいんだよ」

親が子を説き伏せるように、優しく頭を撫でる。

「よくないわ」

雛が声を荒げる。ワガママを言う子どものように、感情的に。

流れる涙を拭おうともせず、嗚咽交じりに言葉を紡ぐ。

「きつとこのまま、私は役割を放棄してただの人形に戻るのかもしれ

ない。

あなたも、もしかしたら、ただの厄になってしまいうのかもかもしれない。間違っているのかもしれない。

けど、こうすることでは、私はあなたに……」

不器用な娘だと思う。

いや、それは俺も変わらないか。

彼女にとって俺は彼女の生み出したモノであり、

俺にとって彼女は……

「思えばずっと、あなたは私のためだけに存在してくれていた。

だから、私もあなたの為に、なにかしてあげたかった。

けど、何をしてあげればいいのかもわからないの……。

ごめんなさい」

涙ながらに彼女が告げる。

違う。俺が欲しかったのはそんな言葉じゃない。

……俺は、君に幸せであって欲しかった。笑っていて欲しかった。

完全に詰んだ。

彼女の幸せを願えば願う程、彼女を苦しめることになる。

彼女を守ってあげたかっただけなのに、

俺がしたことは結果として彼女を苦しめてしまっている。

……自我など持たなければよかった。

彼女を見守るだけにしてあげばよかった。

後悔が募る。

「けど難……俺は、君を幸せにしたいと願っている」

「誰も……そんなの頼んでない」

「ああ、俺のワガママだ。」

だから、君が抱え込むことはないんだ。

「だったら、これは私のワガママ。私はこれ以上私の為に誰かが苦しんで欲しくない。」

あなたに苦しんで欲しくない」

——たとえ私が死んでしまったとしても。

小さく彼女がつぶやく。

厄を流さないことがどのような結果をもたらすか、どうやら身体で理解しているのだろう。

「……ごめん」

「どうしてあなたが謝るの？」

あなたは何も悪くないわ」

「雛……正直俺は、もうどうすればいいのかわからない。」

けど、このままじゃダメだ。君も、俺も、幸せにはなれない」

そうだろう？ と囁きかけると、コクンと雛が首を縦に振る。

「だからさ……一緒に考えよう」

もうお互い、ひとりで抱え込むのはよそう。

俺は君の厄なんだから……」

一呼吸おいて、そして俺は彼女に一つの提案をすることにした。

「だからこうしよう。問題の解決の糸口が見つかるまで……」

* * * * *

かくして俺は今日も彼女に流される。

問題の先送り？ そう言われればそうなのかもしれない。

けど、前と違うことは確かにある。

彼女がよく笑うようになった。

にとりもそれにすぐ気づいたようで、「なにをしたのさ」と目を丸く

して聞いてきたぐらいだ。

「たいしたことじゃないさ」

そう言って、帽子ごしにとりの頭を撫でてやる。

一瞬だけ意外そうな顔を見せたにとりだったが、すぐに俺から距離を取って帽子の位置を直す。

「変なイタズラしなくなったのはいいけど、なんだか、それはそれで気持ち悪いね」

「まあ、その必要もなくなったからね。」

けど、して欲しければ、いつでも……」

「結構よ!」

「結構して欲しい?」

「結構って言ってるでしょ!!」

「こけこつこ?」

「こけーっ!」

そんな俺たちを見て、雛が心底可笑しそうに笑っている。

「もうっ、本当にバカなんだからっ」

不幸は誰にも平等に訪れる。

もしかしたら、それは厄を流さなくっても変わらないのかもしれない。い。

だとしたら、厄とはなんだろう。

俺は、なんなのだろう。

俺は様々な人を不幸にする。

けれど、全てが悪いことばかりではない。

俺が厄である限り、何度でも彼女のもとに帰ってこれる。

「おかえりなさい」

* * * * *

「問題の解決の糸口が見つかるまで……
たくさん話をしよう。

心の距離を埋めていこう。

どんなことがあっても、俺は君に帰る。

お互いが、お互いを支えあおう。

親子のように。

……恋人のように。

【過去】 人形師

ザリザリと、石粉粘土を削る音が永遠と部屋に木霊している。
無心に、無我に、夢中に。

ザリザリと、男がおよそ想像しうる最も美しい曲線を描く。
か細い呼吸も、心臓の鼓動さえも、己にとっては手を震わせる邪魔なものではない。

異様な光景が工房には広がっていた。

人体を模した数多の部品がそこかしこ散乱していて、宝石のように綺麗な眼球が箱に収められ、色とりどりのウィッグがまるで壁紙のようである。

人形作家の工房である。それだけならままだある光景だったかもしれない。

異様なのは、この工房の主その人である。

襤褸を纏い、やせ細った男である。

血走った眼と色濃いクマ。その顔には死相が出ていて、このままでは長くないことは誰の目にも明らかだ。

もつとも、彼を気にかけてくれる人は最早どこにも存在しなかったのだが。

……男は無名の人形作家であった。

ザリザリ、ザリザリ。

まるで命を削る音のようだ。

ザリザリ、ザリザリ。

理想の人体を生成して、繋ぎ合わせる。

それは男の人生の集大成であった。

完成するであろうその人形は、男の総てであった。

「もつと上手い生き方をしろ」

有名になった諸先輩方や後輩たちは口を揃えて男にそう言う。

売るために作れ、と言うのだ。

言いたいことは理解できる。

けれど彼には、己の理想を躰し続けるしかできなかった。

それほどまでに男は不器用で、どうしようもないほどに愚直であった。

(誰からも理解されぬのなら、それでもいい。

ままならぬものを作ったところで、なんになると言うのだ)

偏屈とも取れる言動をしているうちに、敵ばかりが多くなってしまった。

いや、彼自身、そのことにも気づかぬほどに周囲に対して鈍感であつたのだ。

男は、ただ人形を生み出すためだけに人形を制作する。

そういつた経緯で生まれた作品であれど、たまに貫い手は付く。

けれどもそれは労力と時間に見合った金額にはならない。

なけなしの金を得ては、またそれを費やし新たな作品を作り始める。

それが男の生活の全てであつた。

質素で貧乏な生活ではあつたが、男は己の境遇に満足していた。

だからだろうか。

拗らせていた風邪を医者に診てもらつた時に、思いもせぬ余命宣告を貰つた。

内臓がボロボロで、今すぐに入院が必要な体であつたらしい。

散々身体に無理をさせてきた身だ。今更死ぬことに未練はない。

むしろ、これで生きることがを気にせず作品を作ることができると、吹っ切れてさえた。

その日から、男は寢食も忘れて制作を続ける。

……正確には忘れたのではない、必要がなくなつたのだ。

それは誰からも理解されなかつた世界への反抗であり、死を前にした男の決意でもあつた。

地位も名譽も金も要らぬ。

ただ、作りたかつただけなのだ。

己の頭の中にある理想を、顕現させたかっただけなのだ。命を削れば削るほど、男の頭は明確に、明晰になる。

息を殺し、耳鳴りするほどの静寂の中に、作りたいもの、その容かたちが見えてくる。

果たしてその人生の全てを投げうつことで、男はその理想へと近づいたのである。

それは命を賭けるに値する、と男は信じて疑わない。

誰かの価値など、なんの意味も持たない。

ただ、この人生がそれを創ることで報われるのだ。

その顔を掘り進めながらも、恍惚とした感情に支配されているのがわかる。

初めての感情に、理性が追い付いてくる。

——まるで恋のようだ。

その思考に苦笑しながらも、そうであればいいのに、と強く願う。

そうであるのなら、やはりこの子は自分の人生を賭けるに相応しい。

男は、誰からも価値を理解されない人形に、己の命をかけた。

深翠の瞳を嵌めこみ、ドレスを着せ、紅を差し、愛娘にそうするようになんと口づける。

——愛しい娘、叶うならお前を幸せにしてあげたかった。

そう、涙ながらにつぶやくと、男の心臓は動くのをやめた。

大層幸せそうな顔であった。

男の遺体は幾日も放置されたのちに、発見された。

けれどそこに、あの人形の姿はない。

誰にも理解されなかった男の、誰にも理解されなかった理想の形フイグーア

ついで最後まで、男が追い求めたものを知る者はいなかったのである。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第1話

「えーっと、そろそろ出ていってくれないかな」

路地裏の小さなテント。

そこが彼女と俺の愛の巣だった。

「ちよっと、勝手なこと言わないでよ。」

「ここは、私の、家だよ」

おっと、つい心の声を口に出してしまっていたらしい。

俺としたことが、初歩的なミスを犯すだなんてな。

むう。とこちらを睨んでくる青髪青眼の少女。

俺は今、この少女と切っても切れない関係になっている。

雖のもとに帰れないのと、まだ爛れた関係に至ってないのが悔やまれる。

「至らないから!!」

おっと、また心の声を（以下略）

……いや、正直暇なのだ。

自由に動き回れない上に、やることがない。

人ひとりがやっとな横になれる大きさのテントの中には、

ボロボロの服を纏い、みすばらしい恰好をした妖怪。

差し押さえの張り紙は、彼女の全ての持ち物——服に至るまで——に貼られている。

彼女の名は依神紫苑。貧乏神である。

「俺にだって本来帰るべき家はある。

けど、君のせいで帰れないんだよ」

「なんでさ」

「俺はこの幻想郷に漂う無害な自然現象、『厄』だ」

お兄さんは悪い厄じゃないよ。ぴよんぴよん。

「この間も言ったと思うが、俺は君に引つ張られているらしい」

『『ヤク』だったら、妹のところじゃないの?』

彼女の妹は疫病神。贅の限りを尽くし、相手を不幸にする捻くれた性格の妖怪であるらしい。

「正直、ああいうジャラジャラしたのは趣味じゃない」

「そんな理由で!？」

「大事なことだよ。君の方が可愛いし」

俺はキメ顔でそう言った。

「聞こえてるし」

……そう言うとき彼女は布団の上で弱々しく笑った。

依神紫苑は弱りきっていた。

本来人に取り憑くことで、その信仰心や飢えを凌いできたのだ。それが、こうして一人であることは、自殺行為に近い。

「水でも飲むか？」

空き缶に溜まった雨水を彼女の口に含ませる。

そして間の悪いことに、流すべき存在の居ない厄は、どんどん大きくなり、彼女の負担になっているのだろう。

「ありがとう、おじさん」

カサカサの唇、かすれた声で紫苑がそうつぶやく。

「お兄さんな」

訂正して、彼女の頭を優しく撫でてやる。

おやすみ。

……空腹を忘れるには、寝るのが一番だ。

(とはいえ……)

スウ、と安らかな寝息を立て始めた紫苑を見守りながら頭を巡ら

す。

(このままでは本当にヤバいかもしれないな)

貧乏神は己含めて周囲を否応なしに貧乏(不幸)にしてしまう。

貧乏とは、厄のひとつの結果でもあるから、それを溜め込む彼女と俺は相性がいい。

……いや、良すぎたと言うべきか。

ちよつとしたことを切っ掛けに、俺は雛ではなく、紫苑の方へと集まり始めてしまったのだ。

それが俺がここに縛られてしまった理由だ。

当初は楽観的に考えていたものの、俺は自力で流れることができない。

結果としてどんどん濃くなっていく厄は、彼女に激しく弱らせることとなってしまった。

彼女の力は、自らにも向かうものであるから、相当しんどい思いをしているに違いない。

それでも健気に微笑んでくれたのだ。

……なにか、打開策を考えなくては。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第2話

ミンミンとセミが鳴いている。
季節は夏。

このテントにも例外なく熱気は注ぎ込み、
まるでサウナのようになっている。

けれど、この豪邸（イヤミ）の主は、他に行く宛てもなく……。

「ふうー、それにしても暑いね」

ボロボロのテントでうだりながら、少女がつぶやく。

「夏だしねー、シカタナイネー」

「いやー、アツイネー」

そう言いながら、俺は少女の方をちらつと盗み見る。

くくく、暑いのならば脱げばいい。

どうせここには俺たち以外いないのだから……。

「早く夜にならないかな……。お腹すいたよ」

暑い時間帯は、こうしてテントで休み、

暗くなると徘徊して食料を探す。

それが彼女の夏のライフスタイルであるらしい。

冬は反対の行動を取るらしいが、それはきつとまた別の話だ。

冬は冬で、彼女に纏わりついて温めてあげる妄想をしていると、

ふと彼女が首をかしげる。

「……なんだか最近君の力が徐々に大きくなってきてる気がするんだけど」

あー、そう言われればそんな気もする。

というか、厄（俺）を流していないのだから、どんどん集まって密
になっっていくのは当たり前のことなんだけど……。

まあ、俺の力が大きくなれば、実体化だったりなんだったりと、や
れることが増えるのだ。

むしろ都合がいい。

（ということはやはり、現状では雛よりも紫苑に対して厄が流れ込んで
いる……？）

ふむ、これはやはり憂慮すべき事態なのだろうか……。

「暑い……脱いじゃおうかな」

その一言で、考えに耽っていた俺の思考回路がショートする。

紫苑がボロボロのトレーナーをたくしあげる。

「ちよつと紫苑さん!!」

これは全年齢向けの小説なんですよ!!」

据え膳喰わぬは武士の恥。ならば、据え膳になる前に止めねばならぬ。

いや、紫苑ちゃんがどうしてもって言うなら話は変わってくるけど。

え? そうなの? やっちゃっていいの?

苦節20話目にして、ついに濡れ場? こんなに簡単に努力が報われちゃっていいの??

あ、先述の通り、この後の展開は対象年齢が絞られてくるので、続きが気になる方は同人誌を買ってください。

というわけで、

「異世界転生した俺が厄神様の厄になっていた件について」。ここで連載打ち切りです!!!!

敬愛なる読者諸君、俺は、先に行って待ってるぜ!!!!

ひゃっはー!!!!

「全部口に出てる」

妄想への世界へと飛び立とうとしていた俺を、冷たい言葉が刺す。

紫苑はあわあわする俺を睨みつけて、ふんつと鼻を鳴らすと

「何を期待しているのさ。ちゃんと下にも着てるよ」

と言いながら、トレーナーの下に着ていたタンクトップの裾をヒラヒラさせる。

ガツテム!!

ごめんよ。親愛なる読者さま方。

もうしばらく付き合ってもらおうことになりそうです。

とはいえ……

「いや、それはそれで正直、目のやり場に困るんだが……」

お世辞にも豊満とは言えない身体だ。

薄汚れた下着から、少女の持つ最後にして唯一の純潔を象徴する綺麗な肌が露出している。

「ガン見しすぎだよ……」

呆れ気味にそう言い放つと、

差し押さえの札を扇状に重ねて、団扇のように扇ぐ。

……なるほど、そんな使い方があったのか。

痩せすぎた身体。

いくら貧乏神とはいえ、その姿は余りにも……。

「ん？」

無邪気な少女が問うてくる。

「誰かに取り憑かないのか？」

思わず、口をついて出る疑問。

「だって……かわいそうじゃないか」

答える少女の瞳が揺れる。

——ああ、この娘は、あの子と一緒になんだ。

そう、理解した。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第3話

雨が降る。

蒸したテントの中に、紫苑が眠っている。

まるで死んだような見た目だけれど、浅く息はしている。

(けれど、このままではいずれ……)

彼女をなんとかしようにも、俺がここ(彼女)に縛られてしまっていてはどうにもならない。

——まったく、いつだって肝心なところでは役に立たないな、この体は……。

この場所を唯一知っているであろう紫苑の妹——女苑——も、しばらく来る気配はなさそうだ。

女苑は恐らく、紫苑が一人で生きていける限界を知っている。

当然、俺というイレギュラーに思い至ることはないのだろうから、今回はその目測が裏目に出ってしまったているのだ。

「君も私を捨ててしまえばいい」

力なく、紫苑がつぶやく。

「起きてたのか？」

紫苑が薄く微笑む。

昼夜を問わず、紫苑は眠っていることが増えた。

体力も限界なのか、食料を求め外に出ることも皆無になってしまっている。

「このまま終わってしまえば、もう苦しまなくていいのかな」

ずっと貧乏暮らしをしていた妖怪がつぶやく。

「女苑も悲しむぞ」

それと知っていないながら、禁忌の言葉を言う。

紫苑にとって生きる価値とは、即ち己を受け入れてくる人間であるのだ。

「そうか……そうだね」

力ない感じで、床の中で紫苑がつぶやいて、口を閉ざす。それから、長い沈黙が流れたように思う。

「君が人と関わろうとしないのは……」

思い切って彼女に踏み込もうとしたのだが、その言葉は「違うよ」

という言葉に掻き消される。

再び、気まずい沈黙が場を支配する。

「君に似た女の子を知っているよ」

そんな状況に叛逆するように、

気が付くと、俺は彼女に語り掛けていた。

「君と同じように、誰かを不幸にすることを怖がって、一人になった」

紫苑は何も応えない。ただ、目だけがこちらを向いて「それで？」と問いかけている。

「それでも……彼女は自分の力と向き合って、上手くやろうとしてるよ」

この言葉に嘘偽りはない。

俺たちは、これから始めるのだから……。

「私にもできるかな……」

力なく、紫苑がそう虚空に吐く。

「できるさ」

俺は彼女を力づけるように、その手を握った。

「ふふっ、おじさんの話、初めて聞いた気がするよ」

「そうだったけ？」

微笑む彼女の、額を撫でてやる。

「俺は貧乏も不幸も気にしないぞ。そもそも生き物じゃないしな」

言葉の意味を理解しきれしていない紫苑。

「それに、貧乏には慣れてるしな」

そんな彼女に、畳みかけるように優しく語り掛ける。

「おじさん……」

弱々しいながらも、どこか縫るようにこちらを見つめる紫苑。

「お兄さんな」

額を叩きながら、俺はそう訂正する。

(立った!! フラグが立った!!)

脳内ではク○ラが自由に空を羽ばたいている。

あれ? あの話ってク○ラが飛ぶ話だっけ?

まあ、パトラッシュもその脇で一緒に飛んでいるみたいだし、そういう話だったのだろう。

これからは、君を幸せにしてあげるよ!!

口に出さないまでも、そういう愛情を込めて紫苑の額を撫でる。

安らかな顔をして瞳を閉ざす紫苑。

(やっちゃおう? やっちゃおう? これ、キス待ちの顔でしょ??)

苦節21話!! 俺の努力が報われるううう!! ひゃっほい!!

ゆっくりと紫苑に顔を近づける俺の背後から

「何をしているのかしら?」

聞きなれた声が聞こえてきた。

恐る恐る振り返ると、そこにはゴゴゴゴと背後に黒いオーラを

纏った雛が立っていた。

「えっ、雛……さん?」

思わずさん付けで呼んでしまう俺。

長いこと彼女のもとに帰らなかつた俺。

床に臥す少女にキスしようとしている俺。

(完全にアウト案件ですやん!!!)

「なにを、しているのかしら?」

その目は冷たく俺に注がれている。

(まずい、何か言い訳を……)

「ひ、人助け……だよ」

ウソではない。十中八九嘘ではない。残りの一二は邪念かもしれ
ないけど!!

「帰ってこないと思つたら、こんなところで……」

黒い影（シャドウ）を纏つた彼女は、まさに厄神。

俺より厄の纏い方激しいんじゃない?!?!?

「怒ってる?」

と、思わずそんな当たり前の、聞かなくてもわかるようなことを聞いてみる。

「別に」

ウソですよん!!

初めてみるマジギレですよん!!

「ちがつ、違うんだ雛!! 俺は、雛一筋なんだ!!!」

そう叫ぶ俺に、

——スパアアアアン!!

雛の平手が炸裂した。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第4話

S P A A A A A A A A A A A A A A A A N !!

雛の手と俺の頬が心地よいまでのシンフォニーを奏でた。
くくく……さすが雛だ。

俺の厄が1／3は虚空に持つてかれたぜ……。

「……いつまで経っても帰ってこないから、心配したじゃない
そう言うと、雛は目を伏せて拳を握る。

「すまなかった……何か連絡手段があればよかったんだが……」

「いいのよ、別に……。」

なんとなく、どうなっているかは察したし」

はあ、と大きく雛が溜息を吐く。

「お食事にしましょうか」

雛が脇に抱えていたバスケットの中から、水筒、サンドイッチ、果物を広げていく。

そして彼女は伏している紫苑の口の中に、大ぶりのブドウを一粒入れた。

「穰子ちゃんに貰った果物だから、栄養満点で美味しいわよ」

紫苑が咀嚼して喉が動くのを確認すると、雛は次の粒を入れてやる。

何度かそれを繰り返すと、紫苑の手がブドウや他の果物を掴み、自らのペースで食べ始めた。

「はあー、幸せだよ」

やがて固形物も食べる元気が出てきたのか、彼女はサンドイッチに手を伸ばす。

その頃には上体を起こして、両手でガツガツと食べるようになっていた。

さすがの回復力だ。

仮にも名前に『神』がづくだけのことはある。
紫苑の元気になっていく様子を眺めながら、どこか腑に落ちないものを感じる。

……彼女は『幸せ』だと言った。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまです」

穏やかな顔で微笑む紫苑と、まるで親鳥のような表情を見せる雛。ふたりで水筒のお茶を啜る様は、一見すると和やかな食後の風景である。

だが俺の目には、真つ黒で不穏な空気が流れているように見えるのだ!!

(逃げたい……)

いや、別にやましいことはしてないんだけど……とりあえず逃げたい

……もしかして、気のせい?

自意識過剰な俺が抱いた幻想風景?

俺が抱く幻想郷は、皆が仲良くハーレムライフだから!

これは錯覚なんだよね。うん。

本当はみんな仲良しだもんね!! らぶあんどぴーすっ!!

「お姉さん」

栄養のあるものをたくさん食べて、目に見えて血色のよくなった紫苑が呼びかける。

そう呼ばれることに嬉しさを感じるのか、「なあに?」と雛が続きを促す。

「その人と、どういう関係なの?」

はわわ／＼／

やっぱり不穏な雲行きだったんじゃないですかあ!!

「どうって……彼は……私の厄……よ……」

答える雛の歯切れは悪い。

「雛あ……」 縋るような俺の視線を受けて、

「別に、特別な関係じゃないわよ」と、そっぽを向いてしまう。

あー、さっきまでのこと、めっちゃ怒ってますやん。

「じゃあ、お姉さんの恋人じゃないんだよね？」

ニヤリと笑う紫苑は、もうこれ少女のしている表情じゃない。

部長と不倫した挙句、奥さんと直接対決しちゃう系のOLがする表情じゃないですかあ!!

「ええ、まあ……そういうことに……」

雛が答え終わる前に、紫苑が俺の右腕に抱き着いてくる。

トレーナー越しに、痩せてはいるが確かなふくらみの感触が……っ

!!

全集中!! 厄の呼吸!!

今は、この腕だけに神経を集中させるぞ!!

「ちよつと、離れなさいよ」

焦る雛が、俺から紫苑を引き離そうとするが、

「なんでさ。」

やつと会えたんだ。

私と一緒にいても、大丈夫な人が」

涙ながらに紫苑が訴える。

「それは……」

雛にも思い当たるところがあるのだろう。

お互い、一緒に居られる人がいないから、誰からも距離を取る。

この二人は、そんな強情なところまで似通っている。

「それでも、ダメ」

雛が空いてる方の俺の腕を掴む。

あつ……あつ／＼／＼（声にならない悦び

「彼は、私の（厄）なんだから!!」

雛が叫ぶ。

括弧内の都合の悪い言葉は、腕に意識を集中させているので聞こえなかったことにしよう。

『分裂しちゃった／＼／』

ふたりになった俺が、雛と紫苑の前で恥ずかしそうに頭を掻くのであった。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第5話

長屋の連なる村の細い路地の前に、私——博麗の巫女——は立っていた。

周囲に蔓延する淀んだ空気が私に溜息を吐かせる。

(まあ、そんなことだろうと思ってはいたけど)

まるで誰かの性格のように濁った場の乱れを気にせず、路地裏へと足を踏み出す。

それを阻害するように、私のサラシが胸の谷間をなぞるように裂けた。

「TMA（谷間はありません）!!」

嫌悪を感じるより早く——誰に叫んでいるのかはわからないけど——私は絶叫していた。

コホン、と小さく咳払い。

いけない。私としたことが邪念に心を支配されるところだったわ。

いや、実際あるものがあるといただけで、邪でもなんでもないんだけど。

ゾクリ、と首の後ろを嫌な気配が通り抜ける。

この目には見えぬ禍々しい気配、そしてそれらのもたらす実害に私は嫌と言うほど覚えがある。

はあ。

そりや溜め息だつて出る。

私にだって『異変』を選ぶ自由があつたつていいでしょうに。

路地裏という、ただでさえ陰気くさい場所だというのに、

こんなあり得ない不幸が続くので今では誰も近寄ることがなくなっている。

度重なる不運に、周囲に住んでいた人間たちもついに避難して、……それで私に白羽の矢が立ったというわけだ。

「大体厄神様がなんだってこんなところまで来てるのよ……」
厄の押し売り？

仏滅と13日の金曜日が一緒に来ても、こんなに酷いことにはならないでしょうよ。

っていうか、たまには早苗を頼つてもいいんじゃない？

近いからって理由だけでうちの神社を頼らないで欲しいんだけど。それも大した賽銭も納めてない信仰の薄い農民が!!

はあ。

また溜息。

文句を言ったところでしかたがないのはわかっているんだけど（依頼料はもらってるし）。

さらに歩を進める。

プチン、という音がして、腰に巻いたふんどしの紐が切れた。

（よもやふんどしの布地まで切ってくるとは……恐ろしい執念ね）

ニンマリと笑う。

なぜなら今日の私は長袖長ズボン。

およそ巫女らしい恰好とは言えないが、この際気にしてられない。気にしてたら別のことが気になっちゃうし……。

少し動きにくくなった脚を前に出し、行き止まりへとたどり着く。

それは吹き溜まりと呼ぶにはぴったりの場所であった。

そして……汚れ切って、ところどころ穴の空いているテントが目に入った。

「ん、これって……」

私は独り言ちる。

中を確認したくはあるけど、会いたくもない存在に会うのも気が引けるし、

なによりこれ以上近づくのは貞操の危機すら覚える。

だから、私は頭を巡らせて“なぜここにテントがあるのか”を考えて、

一つの結論に達する。

あー、はいはい。なんとなくわかつちやったわ。

この『異変』に触れずして解決する方法を思いついたわ。

私ったら天才ね。

んふっ、と含み笑いとも溜め息とも取れる奇声を発すると、私は妖怪の森へと飛ぶのであった。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第6話

妖怪の森の奥深く、そこには家が建っている。

リビングと寝室と風呂場しかないような、小さな家である。

(まあ、この中は河童の発明品で溢れているのだけれど……)

自動でお湯を沸かしてくれる装置なんかは、正直持って帰りたいくらいに羨ましい。

いや、それよりもどこかの金持ちに売ってしまった方がハッピーだね。

そんなどうでもいいことを考えながら、扉の前に降り立つ。

ふう、とため息をひとつ。

ここは私にとって決して来たかった場所ではない。嫌な思い出が多すぎる。

ブンブンと頭を振って、なにも思い出さないように意識を別のことに向ける。

コホンとひとつ咳払い。

扉をノックをすると、奥の方でバタバタと慌てふためくような気配があった。

少しして、勢いよく扉が開けられる。

姿を現したのはこの家の主——鍵山雛——であった。

雛の浮かべていた安堵の表情は、私を認めると一転して落胆したそれに変わってしまう。

「ああ、霊夢さんですか」

あからさまに表情を変えた雛に

「悪い？」

と、思わずケンカ腰になってしまう。

「別にそういうわけじゃ……」

慌てて弁解を始めた雛に、反射神経でケンカを売ったことを申し訳なくなる。

はやく本題に入ってあげないと、彼女がどんどん可哀そうなことに

なつてしまいそうだった。

「なんで私が来たかわかる？」

「……なんで霊夢さんが？」

雛は茫然とした表情で、私の言葉を繰り返す。

頭が回ってないのだろう。

気が気でない日々を過ごしていたのだと、手に取るようにわかっ
てしまう。

(まったく、帰ってこないあのバカをどれだけ心配してるのよ……)

「はあ……あんたがあいつの面倒をしつかり見てないから、村が大変
よ……」

「あいつ……村……」

そこまで繰り返して雛もピンと来たらしく、顔に生気が蘇る。

元は人形だというのに、薄っすらと頬を染めて、笑顔まで浮かべて
いる。

「私はもう二度とあいつに近づきたくないから、よろしくね」

それだけ言うと、私は雛に背を向ける。

もともと二人は繋がっているのだ。

村まで行けば、自ずとどこへ行くべきかはわかるだろう。

「ああ、それと……貧乏神が一緒だから、何か食べ物でも持って行って
あげるといいわ」

飛び立つ前に、それだけ伝える。

厄と貧乏神がくっついて、今現在どういう事態になっているかは私
も知らない。

ただ、紫苑は餌付けしておけばなんとかなるでしょ。

それじゃ、と言い放ち私は宙へ上がる。

「あの、ありがとうございました」

そんな私の背中に雛の声が乗る。

いつもみたいに小さな声じゃなくて、大きな声が。

思わず唇が釣り上がってしまう。

けど、これはお人好しな行為なんかじゃないわ。

私があいつに会いたくないのは本当。

それに……雛の笑顔を思い出す。

(どうせ被えないのだから、せめて大人しくあるべき場所に収ま
ってほしいわね)

「……バカね。ほんと、大バカ野郎よ」

私を見て落胆した時の、雛のまるでお通夜のような表情を思い出し
て、思わず悪態をついた。

……そういえば、と思い至る。

(これで雛が上手くやってくれば、働かずして依頼料丸儲けなので
は???)

「……お酒買って帰ろ♪」

今日の私ってばメツチャハッピー!!

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第7話

「これは一体どういうことだと思っかね、ワトソン君」と、俺は俺に語り掛ける。

「勝手に主役にならないでくれたまえ、ワトソン君」
対して、俺も俺に語り掛けてきた。

「いやいやいや、主役は俺だから、俺がホームズ」

「ぼっ、おまつ!! 俺こそが主役だったの!! ホームズだったの!!」

「なにおおお!! お前なんて、俺から分離して生まれたくせに!!」

「そのセリフ、そっくりそのまま返してやるわっ!!」

わー、と叫びながら二人してポコポコと殴り合いを始める俺たち厄2つ。

我々、仲が悪く見えるだろうか？

だがしかし、この殴り合いの最中にも身振り手振りアイコンタクトを使用してコミュニケーションを取っているのである。

この後どうするか……せっかく2つの身体を得たのだ。

2兎追えて2兎得られるのだから俄然お得意じゃありませんか!!

じゃあ、攻略が終わった雛と紫苑片方ずつ分け合おうぜ。

で、攻略が終わった落ちて着いたところに再び厄流しされて一つに戻れば……

(ハーレムルート、ここに完成!!!)

ニンマリ、と思わず笑みが漏れる。

さすがは俺、どうやら考えることは全く同じようだ。

ここままでコンマ5秒のやり取りである。

我々ながら完璧な意思疎通、己の才能が恐ろしい……。

とはいえ、表向きは両手を振り回し、ポコポコと優しく殴り合いをしている構図である。

紫苑は泣きそうな顔をして、オロオロと我々を眺めている。

雛はというと、心底困ったような笑みを浮かべて

「仲がいいのね……」と言った。

くっ、俺たちが本気でケンカしてるわけじゃないことを察している

だど!?

『さすが雛、俺の嫁!!』

『誰がお前の嫁じゃー!!』

二人そろって声を上げて、お互いにツツコミを入れる。

(いやいや、俺が雛と結婚して、お前は紫苑だろう?)

(俺は雛を選ぶ。お前は紫苑を選べよ)

俺は相棒に目で語り掛ける。

相棒は指さしジェスチャーで同じことを伝えてくる。

バツコニユニケーション!!

(くくく……どうやらやはり我々は わ理解り合えないらしい)

(ここからは拳で語り合う時間だ)

(勝った方が雛と添い遂げる!!)

(見せてやるよ、この俺の、本気つてやつをなあ!!)

目配せが空中でぶつかり合い、ジュツと黒い火花が散る。

『シュツシュ。シュツシュ』

掛け声に合わせて拳を振る。

が、思考回路が同じせいか、相手の動きが手に取るようにわかってしまう。

結果、我々は空中を殴り合うだけの高度な駆け引きをすることになってしまった。

(痛いのが嫌なわけじゃないよ!! ホントだよ!!)

さながらシャドーボクシング。

はた目にはそういう遊びにしか見えないだろう。

『ぜーはー、ぜーはー』

足腰の疲労が限界に達したところに我々は気づく。

いや、最初から気づいていたのだ。

これは雛を得るためだけの勝負であってはいけない。

俺たち二人の本命が雛であるならば、紫苑のことはどうする?

「こうしよう兄弟、俺たち二人で雛と紫苑を幸せにしよう!!」

「四人で幸せになろう!!」

これが俺たちの結論。

誰かを奪うための闘いなんて意味がない。俺たちは、俺たちの幸せにしたい人を協力して幸せにする。

相棒と肩を組んで、空いた方の手でそれぞれが手を差し出す。

「え、やだ」

うへえ、と紫苑が吐き捨てる。

『ちよ、なんで……さっきまで俺を奪い合ってたやん!!』

綺麗にハモる厄2兄弟（この際どっちが兄か弟かは議論しない）。

「いや、なんかキモいし……」

「じゃ、じゃあ俺一人だど？」

ギロリ、と鋭い視線を感じる。

やばい、厄神様がマジでご立腹の時の表情をしているぞお。

……嫉妬かな？

大丈夫、これは仮定の話さっ!!

「うん……まあ、その……いいかな、つて……」

頬を染めながら頷く紫苑。

やだあ、なにこの子。ちよつと可愛くない????

「わかった。じゃあ俺が一人で雛と紫苑を幸せにする!!」

これなら浮気じゃないよね？ どっちも本気だから!!

雛に語り掛けようとしたら、

「おい、兄弟。早速裏切りやがったな!!」

アミーゴから右ストレートが飛んできた。

「痛えな!! お前はもういらぬ子なんだよ!!」

「ふっぎけん!! 二人を幸せにするのは俺だ!!」

『おのれ、かくなる上は……!!』

お互い、自我と女を賭けての勝負になる。

絶対に負けられない戦いが……始まるっ!!

「ふっつ、この勝負、私に任せてもらうよ」

突然テント内に闖入者の声が響き渡る。

『な、なにやつうううう!!!』

ジャッとテントの入口が開けられると、そこに立っていたのは……
(次回に続く)

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第8話

ふふん、と胸の前で腕を組んだにとりが立っていた。
恐らく雛からここに来ることを聞かされていたのだろう。

「に、にとり!!」

「お前もヒロインの座を狙いに……」

だがごめんよ、我々は2人しかいないから、正ヒロインは2人になっちゃダメだよ……（悔し涙）

「んなわけないでしょ!!」

『でも大丈夫。ハーレム要因として……』

「死ね!!」

はあ、とため息を吐いてにとりが外を指さして言う。

「雌雄を決するなら、いい方法があるよ」

そのテントを出てにとりの指し示すものを見ると、そこには2つの大きな球体と、発射装置らしきものが置かれている。

……嫌な予感しかない。

「チキチキ、巨大な葛籠つづらと巨大な葛籠、花火大会ー!!」

いつのまに握ったのか、にとりが謎の鳴り物をパフパフと鳴らしている。

随分と楽しそうな顔である。

……変なもの発明しやがって。

ん？ 花火？ 花火つつったか、こいつ。

「今回の為に、8尺玉厄流し君を2つ用意したよ」

いやいやいや、おかしいだろ。

ツツコミどころが多すぎる!!

「現代日本だって4尺玉までしかないのに、8尺玉とかもはや核弾頭でしょ!!」

「なんで分裂のこと知らないのに、2つ用意してあるんだよ!!」
それぞれ被らないように、1度でツツコミを終わらせる。

さすが俺s。

「君の厄で壊されちゃったときの予備に2つ持って来たんだけど、結果オーライだったね。」

まあ、機材は無事だった代わりに、ここまで来るのに酷いエロトラップの数だったけど……」

ちよつとなにそれ、お兄さん、興味津々なんだけど!!

15話くらいかけてその話やろうぜ!!!

「最低」

にとりが吐き捨てるように言う。

おっと、心の声が漏れてしまっていたらしい。

「さあ、好きな方を選んで。チキンレースで自らの勇気を証明せよ!!」

「馬鹿でしょ!!」

「勝ち負けの基準ないやん!!」

これ、絶対チキチキもチキンレースも関係ないやつじゃん。

葛籠って、小さいほうを選んだ方が得をする昔話でしょ??

なんで小さいのが存在しないの? 両方同じ大きさとか、橋の女神がブチギレルぞ!!

「大丈夫大丈夫。どっちも電離層で爆発するように仕組んでるから。」

より高く飛んだ方が勝ちでいいんじゃない?」

死ぬ。まじで死ぬって!!

仮に死なないとしても、下手すると成層圏漂うことになるやん。

いや、もしかしてそれが狙いなのか? もう帰ってこれないように

??

俺がにとりだけのものにならないなら、いらないって??

このヤンデレちゃんめ!!

「選ばないの?」

「……じゃあ」

ニヤリとにとりが笑う。

それはそれは、大層邪悪な笑みであった。

「ランダム設定するね。運は神のみぞ知る、ってね」

運命の女神そこにいますけどおおお!!

「逃げるぞ、兄弟!!」

「おうよ、兄弟!!」

シユダダツと駆け出したものの、身体が前に進まない。

進まないどころか、身体が8尺玉の内部へと吸い寄せられていく……。

「もう設定しちゃったもんねー」

にとりが高笑いをしている。

相変わらず腕を組んでいるにとりを眺めて、ああ、腕をほどかない理由をなんとなく察してしまった。

「わかった!! わかったから、とりあえずバンザイしてみよ? ね、にとり!!」

「落ちてきちやうんでしょ? ねえ、全部落ちてきちやうんでしょ?」

我々の言葉に、一瞬無表情になるにとり。

そしてペツと凄まじい表情で唾を吐きだした。

本当に吐き捨てやがった!! お行儀悪いのはダメですよ!!!

「火薬には特別な厄取りホイホイ成分を添付してるから、ぜえーったいに逃げられないよお」

ニタア、と地獄のヤクザどもですらしなような表情を浮かべて、にとりが発射スイッチに手を伸ばす。

『おに、あくま、てんぐ、ダブルパイスラー!!!!!!』

「うっせえ、死ね!!!」

ポチつとな、と奇声を上げながらにとりが発射台のスイッチを押す。

「あ、死ねって言いました? ねえ、死ねって言いました?」

「チキチキ要素どこ?? 助けて、雛!! ひなけてー!!!!!!」

そうして我々は電離層めがけて打ち上げられたのであった。

「また随分と汚い花火ね……」

巫女が上等な酒を飲みながら、そんなことを呟いたとか呟かなかったとか。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第9話

……そもそもだ。

紫苑は空腹を満たしたので一時的に元気になったけれど、俺と一緒にいるべきではないのだ。

電離層を漂いながら、わずかに残った自我で考える。

一緒に居ればいるだけ、彼女の身体には負担がかかる。

それは一緒に居るあいだに彼女がどんどん弱っていったことから明らかだった。

誰かを救おうだなんて、思い上がりも甚だしい。

——俺は、どうしたいんだろうな。

雛に笑っていてほしい。

これは絶対だ。俺がここにいる意味でもある。

じゃあ紫苑は捨てるのか？

……知ってしまった。関わってしまった。

もう忘れることなんてできようはずがない。

じゃあどうする？

問いかけを繰り返す。

堂々巡り。既にどれくらいの時が過ぎたのだろう。

宇宙空間と大気圏との境目に散り散りになっていた厄が、徐々にかき集められていく。

——どうしたい？

——どうする？

——どうあるべきだ？

ここには不幸にするべき相手もない。

ただただ、思考だけが加速していく。

雛の引力も電離層までは届かないようで、いつまでも漂い続ける。

覚悟はまだ、決まらない。

雛は心配してくれているだろうか。

紫苑のテントにやって来た雛は「心配していた」と言ってくれた。

そして俺の手を引いてくれた。
頭が徐々にすつきりしてくる。

ああ、そうだ。俺は帰らなければならぬ。

未だ散っている厄を寄せ集めて、高度数百キロから一気に落ちる。

——どうしたいかだと？

答えなんて決まっている。

俺が欲しいのは……

どうしようもない厄という存在になってしまった俺が欲しいのは

……

この世界における完全無欠のハッピーエンドだ!!

雛も、紫苑も、ふたりとも幸せにしてみせる。

どうするかなんて、後で考えればいい。

* * * * *

「あああああ—————、死ぬ、死ぬ、これ絶対死ぬやつうううううううう!!!」

絶叫を上げながら、加速し続ける俺の身体。

実体化した俺は、質量がある。重力が俺をメツチャ力強く抱いてる。

へへっ、地球を擬人化して女の子に見立てると、この加速度も悪くない。

そうニヤついた瞬間、目前に地面が迫っていて……

ズドン!!

——俺は地球に自らを突き立てた。

妖怪の森にちよつとしたクレーターができる。

着地の衝撃で俺の厄は半分以上持つていかれてしまつて、身体のうちこちが痛む。

それでも足を引きずりながら、彼女のもとを目指して歩く。
しばらく歩くと見慣れた小屋が見えてくる。

「ただいまー!!」

ドアをどんどんと叩く。

俺だよ!! 雛!! 寂しい思いをさせたね!!

今夜はたくさん可愛がつてあげるよ!!!
!!!

ドアが開かれる。

出迎えてくれた雛の瞳は、喜びと愛情の為に潤んでいる(ように見える。俺には)。

なんだか今日は行けそうな気がするうううう!!! (あると思います
!!!)

!!!

「おかえりなさい」

腕を広げて、微笑む雛を抱きしめる。

「ただいま、雛!!」

行け、厄!! そのまま抱き上げて、ベッドインだ!!

「ヤクチュ!!」(※薬物中毒の意味ではありません)

掛け声とともに雛の膝裏に手をかけて、お姫様だっこ。

突然のことに頬を染めながら狼狽える雛。

ああーもう、可愛いなあ!!!

足はそのまま雛の寝室へと向かう。

「ちよつと、どこへ行くのや」

「どこって、このままどこまでもめくるめく官能の世界へ……って、ん
?」

背後からかけられた声に視線を向けると、4つの目が俺を睨みつけていた。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第10話

「そういうことだから……その……降ろして」

部外者の視線を受けて恥ずかしいのか、俺の腕の中で雛が顔を赤くしてつぶやく。

うん、さすがマイエンジェル。可愛すぎか。

「めくるめく官能の世界へ、ちよつくら行ってくる!!」

15分待つてろ!!

来訪者に威勢よくそう言つて、俺は雛を連れて寝室へ……

「ちよ、ちよとお!!」

雛が腕の中でバタバタと暴れている。

「いいじゃん、先つちよ!! 先つちよだけ!! えんがちよするだけだつて!!」

「だーめー、いやーよー」

……そんなに拒否することないじゃないか。

せっかく帰つて来たのにと、しよぼくれる俺。

お姫様抱つこから無理やり逃れた雛が、そんな俺の姿を見て少し申し訳なさそうにしている。

(これは今夜抱ける!!)

しよぼーんとした表情はそのままに、俺は確信していた。

「心の声が聞こえてるつての!!」

外野がうるさい。

「あー、もう、わかつたよ」

俺は来訪者のふたりに向き合う。

河城にとりと依神紫苑。

一部意外ではありながらも、やっぱりかというような顔ぶれでもある。

俺と雛のやりとりを見て、おずおずと紫苑が

「やっぱり……ふたりはそういう仲なの?」

と聞いてきた。

「そうだ」とキツパリ俺が答える。

その言葉に

「……違うのよ？」と間髪入れずに雛が訂正を入れた。

「えっ??」

この世の終わりのような顔をする俺を無視して、雛が紫苑に近づく。

「彼は……そうねえ親みみたいな感じかしら」

「……」

紫苑が黙り込み、そして俯く。

「でも……ふたりは本当に……」

「ねえ、紫苑さん……」

あなたにとつて、彼はどうなの?」

今度は雛が問いかける番のようだ。

それに対して紫苑は視線を虚空にさ迷わせると

「……考えれば考えるほどわからなくなった。

でも、彼と一緒に居る時間は楽しかった。

……ひとりじゃなかった」

雛が紫苑の頭に手を乗せて撫でる。

その表情には、決して他人には理解できない表情が浮かんでいる。

「私もね、そうだったの」

「今でこそ私にはにとりがある。それに彼がいる」

「じゃあ、なんで私のところに来たのさ。」

あの優しい言葉はなんだったのさ」

紫苑が不貞腐れたようにつぶやく。

その目には捨てられた猫のように怨嗟が混じっている。

嘘であるものか。

俺はお前も……。

言葉を飲み込む。

少女を選ばなかった地点で、俺に口を出す権利はない。

雛はそんな紫苑の目をまっすぐに見つめて、

「けど、ごめんなさい。

……これは、『私の厄』よ」

そう、はつきりした声音で言った。

「……私……やっぱり邪魔者みたいだね」

紫苑が席を立ち、玄関へと向かっていく。

俺にはその背中を見守ることしかできない。

……けれど雛は違った。

寂しそうな紫苑の背中に

「でもね、彼の言葉はきつと全部本気だったと思う」と投げかけた。

どんなやりとりがあつたかは知らないけど、大体想像できるわ。

そう微笑んで。

紫苑の足が止まる。

肩が震えている。泣いているのだろうか。

「……」

俺に彼女にどうこうしてあげる資格はない。

紫苑と一緒に居た日々は、彼女につらい思いをさせただけであつた。

だから、彼女の幸せを願うのであれば、俺と言う存在が邪魔なことはわかりきっている。

……だからどうしたというのだ。

「紫苑……」

俺は気が付くと紫苑を後ろから抱きしめていた。

雛の目線も、今は気にならない。

俺は今この瞬間、彼女を抱きしめてあげたいと思ったのだ。

その後のことはきつとなんとかなる……してみせる。

「おじさん……」

俺の腕に顔を埋めて、紫苑が泣いている。

空いた方の手で、その頭を撫でてやる。

「元気でな」

「うん」

フラグをへし折った心が痛む。

……痛むけど、俺はまだ何も諦めてはいない。

紫苑を見送った後、恐る恐る振り向くと

……ドン引きした表情を見せるにとりと、般若の形相をした雛がこちらを見つめていた。

「いや……これは、あの……その……」

言い訳しようとする俺に、雛が無言で床を指さす。

座れ、ということだろうか。

あ、はい。

正座して、三つ指を突こうとした俺の目の前で、にとりが雛に鉄バットを渡した。

「私だって、寂しかったのよ?」

今までにないくらい低い声で雛が言う。

「それはさすがに不可抗力……」

ガンツ。

俺の頬をかすめて、釘バット（厄流しなんたら君）が床に打ち付けられる。

ヒツと声が出て、タマタマがヒュンヒュン。

「あの……雛………さん？」

「何かしら？」

「今夜先っちよだけいいですか？」

「いいわけではないですよ!!」

雛のフルスイングが俺の頭に直撃した。

……久々の厄流しプレイ成功です。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第11話

夏も終わりに差し掛かろうかという頃、俺はにとりの下を訪れていた。

「……なにさ」

怪訝そうな表情のにとりが俺を迎える。

少し逃げ腰なのは、家の中にある機材を壊されることを警戒してなのか、

はたまたエチズラ（エツチなイタズラ）を警戒してのことなのか。

「頼みがある」

「それは雛には言えないこと？」

挑発するような上目遣いが俺を睨みつける。

「別にそういうわけじゃない。ただ、これはにとりにしか出来ないことなんだ」

正直に言えばにとりにも出来ることなのかは俺には判断しかねる。けれど、俺にはもう他に頼れる誰かはいなかった。

（まあ、それも自業自得か）

散々好き放題やって来たのだ。

ツケが回ってきてもおおかしくはない。……だとしても、そのツケを踏み倒してでも俺は俺のエゴを貫く。

それが俺が此処幻想郷にいる意味なのだ。

「嫌だ、と言ったら？」

「お前を殺して俺も死ぬ」

精一杯の愛情を込めてそう告げると、にとりは心底嫌そうな顔をした。

「愛してるよ、にとり」

にとりの手に持ったモーニングスター（一体どこから取り出したんだ）が俺の頭を直撃する。

衝撃でうずくまり、土下座のような姿勢になった俺は、そのままにとりに「頼む」と願う出る。

「なんだってんだい、まったく」

話だけは聞いてあげるよ。諦めたようにつぶやいたとりに、俺は全力で抱き着いた。

(その後もう一発喰らったのは言うまでもない)

.....

それから俺は町へと行き、紫苑のテントを訪れる。

最後に見た時よりもボロボロになっていて、今じゃ風雨をしのげているかすら怪しく見える。

「おじさん」

紫苑が俺に気づいて出迎えてくれる。

厄が周囲から消えてすっかり元気になったのか、多少は顔色もよさそうだ。

「てつきりもう会えないのかと思ったよ」

無邪気な笑顔を見せる紫苑に

「最後に、君にプレゼントを渡そうと思ってね」

俺は残酷な言葉を告げなければならなかった。

「最後、ね」

そう言っつて紫苑は寂しそうに笑ってみせた。

「俺は……君の傍には居られないんだ」

それは彼女も重々わかつているだろう。

けれど、だからなんだというのだ。

彼女にとつては、俺に見捨てられたも同然に思っているだろう。

「だからさ、これを……」

そう言っつて俺は彼女にプレゼントを差し出す。

とても愛らしいとは言えないような、いびつな形をしたぬいぐるみである。

それはにとりの科学力によって一つの封印がなされている。

「なんだい、これは」

出来の悪い黒猫の形を模したぬいぐるみを紫苑が不思議そうに眺めている。

「この中には俺の一部を封印してある」

受け取ろうと手を伸ばしていた紫苑が、咄嗟にその手を引つ込めた。

「安心してくれ。にとりのお陰で、この人形から厄が漏れることはない」

流すことができるのなら、封印を施せるんじゃないのか。

俺はそれをにとりをお願いしたのだった。

「君が寂しくならないように、このぬいぐるみの中からずっと君を見守っているよ」

「おじさん……」

紫苑は受け取ったぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる。

それから

「でもちよつと、ぶさいくだね」

と、くすりと笑った。

「ぬいぐるみなんて初めて作ったんだ。出来の悪さは勘弁してくれ」

人形であれば多少自信はあったのだが、彼女にはこういった可愛らしいものの方が似合っているような気がした。

「きつと君には俺以上の人がいる。」

君の不幸なんて笑って吹き飛ばしてしまうくらいの明るい人が、きつといつか現れる。

その時まで……ちよつとしたお守りだとも思ってくれ」

きつとそんな人こそ、君の隣にいるにふさわしい。

残念ながら、性質的にもそれは俺ではなかった。

そう告げると、紫苑は捨てられた猫のような表情を浮かべた。

「やっぱり、君も……私から離れて行っちゃうんだね……」

私が貧乏神だから……」

「違うぞ、紫苑。」

俺はお前を大切に思っている。だから離れるんだ」

そのことに一切の偽りはない。

叶うなら、君を幸せにするのも俺で在りたかった。

「うん……わかってる」

「俺は本心では今だってお前と一緒に居たいと思ってる」

「……本当？」

「なぜなら俺は今だってお前をいやらしい目で見ているからな。」

そのTシャツから覗く貧相な胸元とか!!」

「……それもどうかと思うよ」

両手で胸元を押さえるようにして紫苑がわめく。

それから……寂しそうに、どこか諦めたように紫苑が口を開く。

「いや、わかったよ。さよならなんだね」

「紫苑……」

俺は………

悔しことに、そんな表情を見せる少女にかける言葉を持っていなかった。

「なあに？」

「……」

……サヨウナラ」

「うん。またいつか!!」

笑顔の少女と別れの挨拶を交わす。

渡したばかりのぬいぐるみの手をぶんぶん振り回して、少女がテントから俺を見送った。

こんなこと幻想郷の現象でしかない俺が祈れた義理はないけど、
どうか、彼女に幸せな未来が訪れますように。

おまけ：紫苑と爛れた三角関係編 第12話

……紫苑と別れた俺は、雛の下へと帰っていく。
妖怪の森の奥深く、雛の住まいに到着するころには既に日も暮れてしまっていた。

「ただいま」

家の扉を開けると、まだ夜も浅いと言うのに明かりがついていない。
い。

出かけているのかな、と考えていると

「おかえりなさい」

暗闇の中から雛が出迎えてくれる。

明かりをつけてから彼女に向き直ると、安堵したように微笑む彼女の表情に胸の奥がチクリと痛んだ。

「帰ってこないとも思ってた？」

おどけるように、そう彼女に問いかける。

「別に……そんなことないけど……」

目を逸らし、唇を震わせる雛。

不器用な彼女の強がり、いじらしく愛らしい。

「帰ってこないほうがよかった？」

彼女に少し近寄って、畳みかけるように意地悪なことを言う。

「そんなわけあるわけないじゃない。……バカ」

伏せた彼女の瞳は、赤く揺らいでいた。

「ごめん」

さすがに言い過ぎたことを詫びて、

「ただいま」

と耳元で囁く。

「おかえりなさい」

こくりと首を揺らして、雛が応える。

その仕草が愛おしくて思わず「愛してるよ、雛」と語り掛ける。

「なによ、急に」

おどおどする彼女ではあったが、唇が緩んでいる——嬉しそうだ。「愛してる」

もう一度耳元で囁きかける。

「うん」

耳まで真っ赤にして雛が応える。

俺はその額に優しく口を付ける。

まるで人の肌のように、温かくて優しい感触が俺の唇に伝わってくる。

「ありがとう」

雛がポツリとつぶやく。

「なにが？」

「私を見てくれたこと。」

ずっとそばに居てくれたこと。

……私を現^{あら}わしてくれたこと」

まいったな。

伝えたつもりはなかったんだけど……

「知っていたわ。ちゃんと私も見ていたもの……」

雛の指が俺の指に絡まる。

雛の頭が俺の肩に乗る。

雛の体が俺の体にくっついた。

「これからも、ずっと私の傍に居てね」

熱に浮かされたような雛の声が脳髄に甘く響く。

「離すものか」

目の前に差し出された雛の首筋に唇を這わせる。

「愛してるよ」

そう囁くと

「——わたしも……」

雛が恥ずかしそうにつぶやいた。

甘く蕩けるような瞳、湿り気を帯びた唇。

俺は吸い込まれるように……って、

「わたしも……なんだって?」

カーッと雛の顔が一段と赤く染まる。

「な、なんでもないわ」

いや、無理。聞きたい。

雛の口からちゃんと聞きたい。

「わ……わ……わ……」

慌てふためく雛がかわいすぎて鼻血（厄）が出そうだ。

「ほら、なんだって?」

「あー、あー、あ……」

「あ???」

「あー……バッチこいやあー……」

恥厄取りホイホイ一番星くんずかひ!!!!!!!の限界に達した雛が、後ろ手に持った

にとり印の釘バットをフルスイング。

見事俺の頭を砕いてお星さまにしてくれました。

いや、まあ自業自得だからしょうがないんだけど。

でも、暗闇の中でずっと釘バット持ちながら待ってたって考える

と、なかなかのホラーじゃない?

あんまり深く考えないようにしながら、俺という厄は再び千々に流

れていくのであった。

……

愛おしい日常を積み重ねる。

その先にあるものがなんだとしても、俺は雛を愛している。

彼女の為に生きる。その決意は永遠に揺るがない。

雛の厄で不幸になる人が増えないように、俺は今日もエツちな厄を

振りまきまくる。

（ガチ切れしたにとりにボコボコにされるまでがワンセット）

その後も地底ヤンデレ編やキノコ編など、なんだかんだで慌ただし

日々を過ごすことになるんだけど、それはまた別の話。
厄神様の厄になった俺の無限アレンに続く約束テッドされた恋ラブの歌ソング。
俺と雛の厄い生活は、まだまだ始まったばかりだ。

——完。